
バカとテストと召喚獣. I F ~ 吉井明久の幼馴染と親友と実妹 ~

蒼き演奏者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストと召喚獣・IF 吉井明久の幼馴染と親友と実妹

【Nコード】

N9342N

【作者名】

蒼き演奏者

【あらすじ】

吉井明久には幼馴染と親友と実妹がいた。素直になれないツンデレ幼馴染、水菜唯^{みずなゆい}。マイペースだが明久のことをいつも助けてくれる心優しい親友、水菜優^{みずなゆう}。ブラコンと言う壁を通り越し、実の兄を我が者にしようとする隠れSな実妹、吉井紫^{よしゆかり}。吉井明久と彼らとFクラスが贈る、壮絶なストーリーである！！

第一章：桜舞う学園で待つのは最低クラス（前書き）

明久「優、唯！一生のお願いだ！！僕に勉強を教えてくださいませんか！？」

優「あ、明久……？一体どうしたの？何処か具合が悪いの？！」

唯「そうよ吉井！！アンタが勉強を教えてなんて天地が引つ繰り返るほどありえないわ！待ってなさい吉井。今、119番通報するから！！！」

明久「2人ともなにその酷いリアクション？！僕は本気だよ！」

優「だって、小学生の頃から勉強嫌いで、高校1年生なっても全然勉強しようとする姿勢を見せなかった明久が勉強を教えてなんて……」

……

明久「2人とも聞いて！僕が勉強して成績がよくなる……」

あの”2人が家に来るんだ（ガタガタブルブル）」

優「”あの”2人……？もしかして玲さんと紫のこと？」

唯「なんですって！？どういこと吉井！！（ギリギリ！！）」

明久「唯！ギブギブギブ！！僕の首を両手で絞めないでえええええええ！！！」

優「お、落ち着いてよ、唯！それ以上すると明久が死ぬ！」

唯「……わかったわ（パツ）」

明久「ぜえ、ぜえ……死ぬかと思った……。簡単に言うと、昨日母さんから電話が来て」

吉井母「吉井。あなたがこれ以上バカでろくな生活を改めないのなら。母さんにも考えがあるわ」

明久「……？考えって？」

吉井母「玲と紫を送るわ。もちろん紫はあなたのいる文月学園に通わせるから」

明久「待ってお母様！！それだけはどうかご勘弁を！！！」

吉井母『なら行動で示しなさい。勉強して成績がよくなり、生活態度も改善すれば考え直すわ』

明久『全力で頑張らせて頂きます！！！』

明久「つというわけなんだ」

優「相変わらず……明久は玲さんと紫が関わると必死だね。……分からなくてもいいけど」

唯「なんてこと……。あの2人が来たらアタシと吉井の2人きりになる時間が減るじゃない（ボソツ）」

明久「唯？ なにか言った？」

唯「なんでもないわ！ フンツ！ いいわ。特別に勉強を教えてあげる。別に吉井のためじゃないわよ！」

優「（相変わらず素直じゃないよ。僕の妹は）。まあ、理由はどうあれ明久のためにもなるわけだし、断る理由もないから。いいよ」

明久「本当！？」

優「その代わり！ 諦めずに頑張って勉強すること！ 僕達が教えるのはいいけど、肝心なのは明久のやる気次第なんだから」

明久「分かってるよ。2人ともよろしく！！」

第一章：桜舞う学園で待つのは最低クラス

問 以下の問いに答えなさい。

『調理の為に火にかける鍋を製作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが調理を始めると問題が発生した。このときの問題点とマグネシウムの代わりに用いるべき金属合金の例を一つ挙げなさい』

姫路瑞希の答え

『問題点：マグネシウムは火にかけると激しく酸素と反応するため危険であるという点』

『合金の例：ジュラルミン』

教師のコメント

正解です。合金なので『鉄』では駄目という引っ掛け問題だったのですが引っ掛かりませんでしたね。

水菜優の答え

『合金の例：オリハルコン』

教師のコメント

確かに合金ですが幻の金属が鍋に用いられることはありません。

水菜唯の答え

『問題点：鍋の製作に失敗したこと』

土屋康太の答え

『問題点：ガス代を払ってなかったこと』

教師のコメント

そこは問題点ではありません。

吉井明久の答え

『合金の例：マーブルセラミック加工』

教師のコメント

先生も愛用していますよ。

春。高校2年生となる僕達にとっては2度目となる季節。

桜舞う通学路を僕の親友である吉井明久と妹の水菜唯といつもどおり一緒に早めに文月学園に向けて登校する。

明久「それで、優はどのクラスになると思う？」

優「僕？僕は明久と同じFクラスだよ」

明久「ええ？！なんで！？優の成績なら確実にBクラスに行ける筈だよな？」

優「それは明久も同じでしょ？理由は全教科の名前を無記入にしたから」

唯「ちなみに、アタシは名前以外、解答欄全部無記入よ」

明久「な、なんだってええええ？！？！なんでそんなことを！？」

まあそれが普通の反応だね。でも僕達の答えは決まっている。

優「簡単な理由だよ。ほら、クラス振り分け試験の前に約束したよね？『一緒に同じクラスになるうね』って」

明久「それは確かに約束したけど。でも、どうして僕がFクラスになると分かったの？」

唯「アンタねえ……。いい？クラス振り分け試験の時、吉井は容態の悪くなった姫路さんを保健室に連れて行くために同行したでしょ？」

優「試験中の退出は全教科無得点扱い。つまり、容態の悪くなった姫路さんと姫路さんを保健室に連れて行く明久もこれに該当する……。明久の言い分が正しいのに……。ね」

唯「まったく！あの試験官にはムカついたわ！！吉井の言うことが正しいのに、教室を出ただけで無得点扱いなんて！！」

優「本当なら僕達も明久と同じように行きたかったけど、流石に4人も退出したら怪しまれるからね。だから僕は名前を消して」

唯「アタシは解答欄の答えを全部消したの」

他の人が聞いたら『ありえない』と言うだろう。

でも、僕達は後悔していない。

明久「でも！そんな約束のために最低クラスであるFクラスになるんだよ！？」

優「それだけじゃないよ。明久の行動は正しいから。それを証明するためにしたんだ。僕達は明久の優しさを誰よりも知っている。だからこそ、明久と同じクラスになるって約束したんだよ？」

唯「吉井だけFクラスにいつて、アタシ達だけが他のクラスに行くなんて嫌よ！！だから、吉井が気にすることはないわ。後悔の微塵もないわけだし」

明久「でも！」

唯「くどい！後悔してないって言ってるでしょ？！」

優「それとも迷惑だった？明久は嫌なの？僕達と一緒にいることが……？」

明久「いや、そんなことない！！寧ろ大歓迎だよ！！」

優「そつか。じゃあ、この話はお終い！そろそろ学園に着く頃だしね」

無理やり話題を切り上げてそこからお互いに色々な話をしながら”彼”が待つ場所まで歩いていく。

しばらくすると桜のある場所に”彼”がいた。

文月学園補習担当こと、西村先生。通称『鉄人』が。

西村「遅いぞ！吉井！水菜兄妹！！それと……優。お前、いま俺のことを鉄人と考えてなかったか？」

優「まさか、西村先生。きっと先生の勘違いですよ。ね？2人とも」

明久「そうですよ。先生の考えすぎですよ」

唯「アタシもそう思いますよ？西村先生」

西村「むう？……そうか」

危ない。2人がフォローしてくれなかったら確実に職員室に呼び出されるところだった。

明久「それはそうと西村先生。早く封筒を渡してください」

西村「おっと、そうだったな。が、渡す前にお前達に言うことがある」

優「？なんですか？」

西村「吉井のことは聞いてはいるが、水菜兄妹。なんなんだあの振り分け試験の答えは？全教科名前無記入に全教科解答無記入など……先生は未だ嘗て見たことも聞いたこともないぞ？」

優「あれ？そうなんですか？おかしいですね……ちゃんと記入したと思ったんですけど」

唯「本当ですね。不思議なこともあるもんですね」

まあ、全教科名前無記入と全教科解答無記入なんてありえないからね。

意図的にしなければ。

でも、悪まで白を切ることにした僕と唯。

西村「まあ……お前達のことだから吉井絡みなんだろう？理由は大体見当がつく。先生はお前達なら確実にBクラスになれると思っていたが。まったく、本当にお前達は先生の予想の斜め上をいくな」

……バレてたよ。しかも理由も見当がついてるなんて……流石と
いうかなんというか。

唯「ってことは、やっぱりアタシを含めて吉井と優兄もFクラス行きなんでしょう？」

西村「封筒を渡してないのにその発言……。やはりワザとだったか」

明久「ゆ、唯！何でバラすの！？」

唯「どうせ誤魔化せないわよ。全教科名前無記入と全教科解答無記入なんて意図的にしなきゃ100%できないわ。それにバレてもアタシ達がFクラス行きという結果が変わるわけじゃないんだし」

優「唯の言うとおりだよ、明久。それにバレたって、迷惑になった人がいる？」

そう。これは僕達の問題。1年間、最低クラスに通うだけで成績に影響するとは限らない。それに3年のクラス振り分け試験でいい結果を出せば良いのだし。

西村「はあ……全く、お前達は。どうしてそう自分の身を投げ出せるような真似ができるんだ？先生ならそんなこと絶対にしないぞ」

優「いや、先生じゃなくても普通の人ならそんなことしませんよ。

……やっぱり僕もバカなんでしょうね」

唯「優兄がバカならアタシも同じね」

明久「2人とも！そんなことないよ！2人は僕なんかより勉強ができるじゃないか！」

優「いや、明久。そういう意味じゃなくてね」

明久「????」

絶対分かってないっていう顔だね。分かりやすい……。

優「それよりも西村先生。そろそろクラスに行ってもよろしいでしょうか？流石に初日で遅刻なんて恥ずかしいですし」

西村「ああ。行っているが。その前に吉井、水菜兄妹。お前達にもう1つ言うことがある」

明久「はい？なんですか」

西村「悪まで俺自身の意見だが。お前達がしたことが間違っているのかは正直、俺には分からない。だが、お前達は決して後悔していないことは分かる。だったらそれでいい。お前達にはお前達の人生がある。だから、今は後ろを向かず前を見て進め！……俺からは以上だ」

優&唯&明久「………はい!!!」

西村先生のお言葉聞いた僕達は教室にへと向かう。

自分達が1年間通うこととなる最低クラスであるFクラスへと。

第二章：AクラスとFクラスはまさに天と地の差

問 以下の意味を持つことわざを答えなさい。

- 『(1) 得意なことでも失敗する事』
- 『(2) 悪いことがあった上に更に悪いことが起こる喩え』

姫路瑞希の答え

- 『(1) 弘法も筆の誤り』
- 『(2) 泣きつ面に蜂』

教師のコメント

正解です。他にも(1)なら『河童の川流れ』や『猿も木から落ちる』、(2)なら『踏んだり蹴ったり』や『弱り目に祟り目』などがあります。

水菜優の答え

- 『(2) 泣きつ面にハンカチを渡す』
- 吉井明久の答え
- 『(2) 泣きつ面の涙を拭う』

教師のコメント

ことわざの答えとしては不正解ですが、先生はこの答えは嫌いではありません。

水菜唯の答え

- 『(1) 河童も木から落ちますか?』

教師のコメント

先生に聞かれても返答に困ります。

土屋康太の答え

『（１）弘法の川流れ』

教師のコメント

シユールな光景ですね。

島田美波の答え

『（１）弘法も河童の泣きっ面の筆』

教師のコメント

（１）と（２）のことわざの一部分が混ざって意味不明です。そろそろ日本語に慣れてください。

唯「なに……あれ？」

明久「Ａクラスの設備……凄すぎ……」

優「システムデスク、リクライニング、個人エアコン、パソコン、冷蔵庫など……本当に、ここ教室？」

僕達はＦクラスに向かう途中、Ａクラスに通りかかり覗き込んで

いた。

僕達が文月学園はAクラスから順位にFクラスまである。

Aクラスには一番成績のよい者だけが集められ、逆にFクラスは成績が最低な者が集められる。

さらにこの学園の変わっているところはクラスによって設備が違うところだ。

先ほど述べたようにAクラスの設備は異常だ。

無駄に広く無駄に豪華。これで他のクラスと学費が一緒なのだから凄い格差だ。

優「Aクラスがこうなら……僕達のFクラスはどれだけ酷いんだろ？」

唯「やめて、優兄……。想像しそうになるから」

明久「あ！2人とも見て！」

明久の指し示す方向に、Aクラスの1人の女子学生が教壇に立つてクラスに挨拶をしているところだった。

黒髪のロングヘアの似合う美女。物静かな雰囲気を漂わせる彼女こそAクラス代表にして学年順位1位の霧島翔子さんだ。あんな綺麗な人なのに彼氏がいないらしい。風の噂では男に興味がなく、女の子しか眼中にないらしいが、悪まで噂は噂。真意は現在進行形で謎だ。

優「っと！これ以上覗いて見つかかりそうだし、そろそろ教室に行こうか？」

明久「ああ、そうだね。Fクラスの設備……まともだと良いよね」

唯「だから！想像しちゃうからやめなさいよ！！」

明久「……で、着いたのはいいけど……本当に、ここは教室なの？」

優「これは……想像以上に……酷すぎる」

唯「なによこれ……ありえないわ！！格差ありすぎでしょ！！」

Fクラスの設備は先ほどのAクラスと比較すれば天と地の差だ。

畳、卓袱台、座布団、割れた窓ガラス……。

一般の教室ですら、これより豪華に見えてくるよ……。

優「文句言っても仕方ない。今日からここが僕達の通う教室になるんだから」

唯「衛生管理や健康管理が危なくなる教室って……なに？学生の本分が勉強ならそれを行う場所が病原菌撒いてたら本末転倒じゃない！？もし病気にでもなったら訴えてやる！！」

明久「唯、落ち着いて！気持ちは分かるけど落ち着いて深呼吸してみるんだ！」

唯「ああ！！この煮えたぎる憤怒を何処かにぶちまけたい！！」

まあ、唯の気持ちも分からなくもないが、ここで文句を言っ

も仕方がないのだし。

唯を落着かせるのは明久に任せ、僕は教室のドアの取っ手口に手を掛け、開けようとする。

優「（ガラッ！）遅れてすみまs」

????「早く座れ！この蛆虫野郎！」

最悪だ！まさか担任ですら最低とは思わなかった……て、この声は……。

雄二「って、優?!それに明久に唯まで!!!」

明久「おはよう。雄二」

唯「おはよう。坂本君」

雄二「ああ……おはよう。じゃねえ！なんでお前らがFクラスに!?!」

坂本雄二。去年から同じクラスで僕にとっては親友。

明久にとっては悪友。唯にとって友人。

当然、僕達の成績のことは知っているのだから驚くのは無理もない。

優「色々あってね。今日から僕達もFクラスなんだ」

明久「というか、雄二の方こそ、なにやってるの?」

雄二「あ、ああ……。先生が遅くなっているから、代わりに教壇に

上がってみた」

唯「はい？先生の代わりって……なんで坂本君が？」

雄二「一応このクラスの最高成績者だからな」

明久「つまり、雄二がこのFクラスの代表ってこと？」

雄二「そういうことだ。で、お前達がFクラスになった訳ってなんだ？」

明久「それなんだけど……実は」

???「すみません。そこを通してもらえませんか？」

明久が雄二に事情を説明しようとしたら、覇気のない声が背後から聞こえた。

鼠色のスーツにネクタイで眼鏡をかけた目の細い初老の男性であり、文月学園社会担当の福原先生その人である。

福原「それと4人とも席についてください。HRを始めますので」

明久「あ、はい！……って、先生。僕達の席はどこなんですか？」

福原「お好きな席にどうぞ」

唯「はい？ようするに……席順すら決まってるの！？」

優「どんだけ最低なんですか？このクラス……」

福原「それがFクラスのスタイルですから」

嫌なスタイルだ……。

僕はとりあえず明久の前の席、正確には窓側の席だ。窓の一部が割れているため隙間風が当たる。春だからまだいいが、冬になったらこれはきつい。ちなみに唯は明久の後ろの席だ。

教壇に立った福原先生はさっそく自己紹介をしようと自分の名前を黒板に書こうとして黒板の前に体を向けたが、何も書かずにすぐさま振り返ってしまう……あれ？

福原「皆さん、おはようございます。私が2年Fクラス担任の福原慎です。これから1年間よろしく願います」

優「先生、すみません」

福原「はい。なんですか？」

優「なんで名前を書かないのですか？」

福原「チョークがありませんでしたので」

なるほど……て！じゃあ、僕達はどう授業を受けると！？
黒板に何も書かれていないとノートになにも写せないよ？！

福原「安心してください。後で白のチョークを取りに行きますので」

そついう問題なの？

普通は既に支給されているのが当たり前だね？

しかも白って白だけなの？赤や青、黄色すら支給されないの？このクラス？！

Fクラス男子A「先生！俺の座布団に綿がほとんど入っていないです！」

福原「ああ、はい。我慢してください」

Fクラス男子B「先生！！俺の卓袱台の足が折れてます！」

福原「後で木工用ボンドが支給されていますので、自分で直してください」

Fクラス男子C「先生！！窓が割れていて風が寒いんですけど！」

福原「分かりました。セロハンテープとビニール袋の支給を申請しましょう」

これだけの設備の酷さの数々に福原先生は淡々と答えていく……。ほとんど根本的に解決していない部分が多い上に、木工用ボンドにセロハンテープ、ビニール袋ってそれは悪まで応急処置程度にしかならないのでは？

てか、新しく買い換える資金やまともな改善すらないの？！

福原「では、これ以上の質問はないみたいです。そろそろ自己紹介を始めましょう。そうですね、まずは廊下側の方から順にどう

ぞ」

廊下側の席つということは僕の自己紹介はかなり待つ必要がありそうだ。

最初に自己紹介する彼女……間違えた。彼が自己紹介を始める。

秀吉「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる。今年1年よろしくじや。……それとよく間違われるのじゃが、わしは男じゃ」

そういった瞬間、急に教室が騒がしくなる。

「バカな?!男だと!?!」「そんな!俺、狙ってたのに!!!」「どう見ても女だろ?!」「なんで世界はこつも残酷なんだ!!!」……etc。

Fクラス男子のほとんどが困惑の声を挙げる。

確か……秀吉には双子のお姉さんがいるんだっけ?名前は確か、

木下優子さん。

彼女の成績ならおそらくAクラスにいるはずだ。

とにかく!秀吉はその優子さんと非常によく似ている。

おそらく2人とも同じ格好をすれば見分けがつかないほどののだ。

明久「そんなバカな!嘘だといって秀吉!」

唯「アンタは去年から木下君の性別知ってるでしょ!?(ガシッ!ギリギリ!!!)」

明久「アダダダダダ!?!なんで唯が怒るの?!アイアンクローはやめてえええ?!死ぬ死ぬ死ぬううう!?!?!」

いつの間にか秀吉の性別を知っているはずの明久が、唯の十八番であるアイアンクローをもろに喰らっていた。最初の自己紹介からこの騒ぎ……。とんでもなくシニールだ。

福原「皆さん。お静かにお願いします。他の人の自己紹介がありますので」

福原先生がそういうと先ほどの騒ぎが嘘のように静かになっていく……。

康太「……土屋康太」

そう言っただけで直ぐに座ってしまった。

で、康太もFクラスなんだ。それにしても自己紹介が短い……。

まあ、彼は元々そんなに口数が多いわけではないのだが。

土屋康太。カメラや保健体育の知識に関してはこの学園の右に出るものはいない程の実力の持ち主。

保健体育の成績だけはAクラス並みだ。……ただ、本人は知識は豊富だが、実物というか女子のスカートがほんの少し捲れただけで大量の鼻血（しかも致死量を軽く超えているほどの出血）を噴出する。犯罪行為擦れ擦れな事しているのに、ピュアというかなんというか……。

「……」
です。海外育ちで、日本語は会話は出来るけど読み書きが苦手です」

などと考えていると珍しく唯以外の女子の声が聞こえた。やっぱり男子だけの教室って妙に息苦しいよね。

「……」
あ、でも英語も苦手です。育ちはドイツだったんで。趣味

は……吉井明久を殴ることです」

いや待って、なにそのピンポイントかつ危ない趣向は！？唯でもそんな趣味はないのに！！

唯「優兄……？それはどういう意味かな？」

優「いや僕何も言っていないよ、唯？」

唯「……なんとなくバカにされた気がしたんだけど……気のせい？」

唯には読心術の心得でも備わっているのだろうか？実の妹ながら恐ろしい……。

島田「ハロハロー」

明久「あう……。し、島田さん」

島田「吉井。今年もよろしくね」

島田美波。帰国子女であり、数学の計算問題の成績はBクラス並。しかし日本語を使ったほとんどの科目は最低ランク。とくに現国が壊滅的だ。ここだけの話だが、彼女もまた明久のことを密かに好んでいるのだ。妹もそのことにはとくに気付いている。まあ、妹にとっては恋のライバルというものだ。2人の好意に気付いていない明久も明久なだけだ。

と、僕の前の席の人の自己紹介を終えたからいよいよ僕の番か。そう思って立ち上がりさっそく自己紹介をする。

優「水菜優です。これと言える紹介はないですが、皆さん今年1年

「よろしくお願いします！」

そう言って僕は席（座布団）に座る。

さて、これで残るは僕が知る限りで明久と唯二だけになった。

明久「……こほん！ えーっと、吉井明久です。気軽に『ダーリン』って呼んで下さいね。」

Fクラス男子 ♪♪♪♪♪ ダアアアー——リイイイイ
ンンンンン!!..! ♪♪♪♪♪

僕と唯、秀吉、康太、雄二、美波さんを除いたFクラス男子全員が一斉にダーリンという呼び声を挙げ、教室中だけでなく外にも響き渡った。

本当にノリのいいクラスメイト達だ。

明久のほうは自分の冗談を本気で返すクラスメイトのリアクションに相当のダメージを受けていた。

今にも吐きそうなつらい表情だ。

明久「……失礼。忘れてください。とにかく、よろしく願いします」

明久の自己紹介が終わり、いよいよ唯の自己紹介だ。

唯「水菜唯よ。名字で分かるけど、明久の前に紹介した優兄の妹です。ちなみに優兄に取り入るうとしても無駄ですから。アタシには既に好きな人がいますしね」

またもや教室が騒々しくなる。

「そんなバカなああああ？！」「終わった。俺の偉大なる計画が一瞬にして灰と化した！」「誰なんだ！？その羨ましい奴は！？」「殺したいほど……妬ましい……！」

これは僕の想像を超えた展開だ。妹にしては思い切ったことをする……。これは宣誓布告だ。誰に向けての宣誓布告なのかは定かではないが、どうやら妹は本気みたいだ。

明久「えええ？！唯には好きな人がいるの！？知らなかった……。誰なんだその羨ましい限りな罪作りな男は……！」

唯&優「……………」

その羨ましい限りな罪作りな男は君だよ……明久。相変わらず妙なところで鈍感なんだから……。

秀吉の自己紹介より騒がしいクラスの教室のドアがガラツと開き、1人の女子生徒が入ってきた。

???「あ、あの、遅れて、すみま、せん」

Fクラス『『『『『……え？』『』『』『』』』』』

先ほどまでの大騒ぎが1人の女子生徒の登場でいとも簡単に静まり返る。

まあ、当然といえば当然かな。

事情を知らない者にとってはそれはあまりにもありえない光景だからね。

福原「丁度良かった。今、自己紹介をしている途中でしたので姫路さんもお願いします」

姫路「あ、はい！あの、姫路瑞希といいます。よろしく願いします……」

現在、学年順位2位の成績を誇る才色兼備であり、Aクラスにいる筈の存在。

姫路瑞希が、Fクラスのクラスメイトとしているのだから。

第二章：AクラスとFクラスはまさに天と地の差（後書き）

蒼き演奏者「原作知識は結構知っているので、早めに更新することができました。それにしても…… たった1日近くでPVアクセス数1000人突破するとは、予想以上に人気なんですね。『バカテス』。これからもよろしくお願いします。感想や意見、質問がありましたらどうぞ」

番外：人物紹介

名前：水菜 優 みずな ゆう

年齢：16歳

性別：男

付属：文月学園2年Fクラス

特技：変装、ゲーム

肩書き：『観察処分者』、『百の容姿を持つ魔術師』

部活：帰宅部

詳細：容姿と外見共に普通な少年だが、家系が忍者の末裔のためか身体能力は高い。身長は160cmで小柄。明久とは幼稚園の頃から付き合い。そのため明久の家庭の事情に関しては深く同情している。成績においてはBクラス並みなのだが、何故か明久と同じ『観察処分者』の肩書きを持つ。性格はマイペースで明久に頼まれ勉強を教えたり生活費の援助などしてくれるほどの優しさを持つ。趣味はテレビゲームでの対戦ゲームが得意で明久の家に来てはよく対戦相手となって遊んでいる。また、ムツツリー二のことを本名で呼んでいる数少ない人物。変装のプロで一瞬にして容姿はおるか声や性格までも真似ることができる。が、本人はあまりやりたがらない。『百の容姿を持つ魔術師』と言われているが実際は、唯・明久・雄二・秀吉・康太の5人のバリエーションしかない。

召喚獣のイメージは青いローブを着込み、左手に円形の盾を持つ。他の召喚獣と違い耐久力が高い分、攻撃力が低い。代わりに遠距離からの射撃攻撃やサポートを得意とする。攻撃型が主な召喚獣の中で守備型の召喚獣なのが非常に珍しい。

腕輪の能力は前方に巨大な砲撃を放つ『砲撃』を持つ。

名前：水菜^{みずな}
唯^{ゆい}

年齢：16歳

性別：女

付属：文月学園2年Fクラス

特技：捕縛術、アイアンクロー、首絞め、お仕置き、料理

肩書き：『明久限定本格ツンデレ少女』、『百の捕縛術を持つ魔女』
部活：帰宅部

詳細：容姿は美少女、胸は普通、性格は少々ツンデレ気味な優の妹。成績はBクラス並みだが英語だけは壊滅的な成績の持ち主。幼き頃から明久のことを好いているが持ち前の性格上、なかなか素直になれない。家系が忍者の末裔のためか身体能力は高く縄やチェーンを使った捕縛術を得意とする。しかし、その能力は主に明久に向けられているため色々と誤解されることが多い（自業自得なのだが）。

『百の捕縛術を持つ魔女』とは言われているが実際はそんなに多くはない。姫路と美波とはライバル兼親友。後に姫路と美波とで『明久の浮気性撲滅委員会』、通称『AUB』を立ち上げることになる。

召喚獣のイメージは巫女服に箒（仕込み刀式）。動きにくそうな服装だが、見た目と裏腹に機動力が高く居合い切りが得意で、攻撃力が非常に高い。が、巫女服ということもあるのか防御力は低い。

腕輪の能力は居合い切りと同時に前方へ扇状に真空の刃を放つ『真空刃』を持つ。

番外：人物紹介（後書き）

オマケくバカテス

問 以下の意味を持つ四字熟語を答えなさい。

- 『（１）考え方や好みなどが各人それぞれに違っていること』
- 『（２）新たな成果を挙げて、悪い評判をしりぞけること』
- 『（３）一度傷ついた名誉を取り戻すこと』

姫路瑞希の答え

- 『（１）十人十色』
- 『（２）汚名返上』
- 『（３）名誉挽回』

教師のコメント

お見事！全問正解です。簡単すぎましたかね？

吉井明久の答え

- 『（２）汚名挽回』
- 『（３）名誉返上』

教師のコメント

君なら絶対そう答えると思っていました。

水菜優の答え

- 『（１）十人十色』

『(2) 汚名返上』

『(3) 名誉挽回』

欄外：悪戦苦闘、因果応報、意気投合、応急処置、一心不乱、暗黒時代、永久不滅、異口同音、一刀両断、四面楚歌、一生懸命、悪逆無道、以心伝心、意気消沈、才色兼備、意気衝天、一期一会、奇奇怪怪、一言一句、永劫回帰、一日一善、完全燃烧、起死回生、一利一害、一騎当千、百発百中、曖昧模糊、一触即発、完全無欠、一世一代、百鬼夜行、一石二鳥、一致団結、危機一髪……etc。

教師のコメント

この問題に答えようとする君の必死さがとてもよく伝わりました。

水菜唯の答え

『(2) 汚名抹消』

島田美波の答え

『(3) 名誉強奪』

土屋康太の答え

『(2) 悪行隠滅』

教師のコメント

この四字熟語はあなた達のためにあるのだと先生は思いました。

第三章：ここから始まる試験召喚戦争

問 以下の英文を訳しなさい。

『This is the bookshelf that my
grandmother had used regularly
y.』

姫路瑞希の答え

『これは私の祖母が愛用していた本棚です』

教師のコメント

正解です。きちんと勉強していますね。

土屋康太の答え

『これは』

教師のコメント

訳せたのはThisだけですか。

水菜唯の答え

『英語が読めないからって死ぬわけじゃない!!』

教師のコメント

言いたい事は分かりますが、せめてThisとmyだけでも訳してほしかったです。

吉井明久の答え

『これは私の祖母が愛していた本棚です』

教師のコメント

書き終えたときに、この文書だと祖母は人以外を愛してしまったように聞こえてしまうことに気づいてください。こんな書き方をするなんて君だけ

水菜優の答え

『これは私の祖母が愛していた本棚です』

教師のコメント

だと思っていたのですが……まさかもう1人いようとは……。

『二度あることは三度ある』ということわざがある。

姫路さんの登場により、Fクラスは秀吉や唯のときより騒がしくなる。

そんな状況を見かねたFクラスの1人が彼女に質問した。

ええ〜っと、確か彼は須川亮……君……だったけ？校内新聞で失恋回数を取り上げられるほど失恋した人物だ。

須川「はい！質問です！」

姫路「あ、は、はい。なんですか？」

須川「……なんでこんなところにいるのですか？」

聞き様によつてはかなり失礼だが、当然といえば当然の疑問だ。どういうことが起きればAクラス並みの実力者であるはずの彼女が最低クラスの生徒として来るなんて理解できないよね。

まあ、僕と明久と唯はその点の事情は知っているけどね。

姫路「そ、その……振り分け試験の最中、高熱を出してしまいました……」

その一言を聞いて「ああ……なるほど」とクラス全員が納得するように頷いた。

そう。それが彼女がここにいる理由だ。

試験中の退出は全教科無得点扱い。いかなる理由があろうと例外はない。

明久も彼女の体調を心配し彼女に同行した結果、Fクラス行きになつたのだ。

まあ、僕達は意図的に全教科名前無記入と全教科解答無記入でFクラスになつただけ。

Fクラス男子B「そういえば、俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに……」

Fクラス男子A「ああ。科学の問題だろ？あれは難しかったな」

Fクラス男子E「俺は弟が事故に遭つたと聞いて実力が出し切れなくて」

Fクラス男子C「黙れ。一人っ子」

Fクラス男子D「前の晩、彼女が寝かしてくれなくて」

須川「今年一番の大嘘をありがとう」

これは想像以上のバカだらけ……だね。

姫路「で、では。よろしく願いします！」

そう言っ て姫路さんは頭をぺこりと下げ、逃げるような急ぎ足で明久の右隣の席に座る。

姫路「き、緊張しましたー……」

席に着くと卓袱台に突っ伏し、安堵の息を漏らした。

明久の方を見てみると頬が紅く染まっており、彼女にどう声を掛け様かと迷っている……。

ああ、こりやあ……絶対恋した者の反応だね……。

優「（兄としては妹の恋を応援し、明久と結ばれて欲しいけど……余計なお節介だよね）」

それにこれは唯の恋の問題だ。兄とは言えど妹の恋愛にちょっかい出したりするべきじゃない。

まあ……当分の間は様子見ということにしよう。

明久「あ、あの姫「姫路」」

明久が勇気を振り絞って話しかけようとする途中、雄二に遮られてしまう。

姫路「あ、はい。なんでしょう。ええっと……」

雄二「坂本だ。坂本雄二。よろしくな」

姫路「あ、はい。姫路瑞希です。よろしく願いします」

そう言つて雄二に深々と頭を下げる姫路さん。これだけで育ちの良さが分かるものだ。

雄二「ところで、姫路。体調の方はもう良いのか？」

明久「あ、それは「アタシも気になるわね」あう……」

今度は唯が明久の話しかける途中で遮った。

唯「初めまして、姫路さん。アタシは水菜唯。で、こっちがアタシの兄で水菜優。で、さっきから話しかけようとする彼が吉井明久よ」

優「初めまして。唯の兄で、優です」

明久「あの姫路さん。本当に体調は大丈夫なの……？」

姫路「あ、初めまして。姫路瑞希です。水菜さん、水菜君……って、吉井君！？」

姫路さんは唯と僕に自己紹介をしたあと明久のことにようやく気がついた。

さっきから話しかけようとした明久に気付かない姫路さんは、少し抜けているところがあるのかもしれない。

それを良しにここぞとばかりに雄二が攻める。

雄二「あー、姫路。明久がブサイクでスマン」

そう言う雄二にすぐさま姫路さんと唯が否定する。

姫路「そ、そんな！ 目もパツチリしてるし、顔のラインも細くて綺麗ですし、全然ブサイクなんかじゃありませんよ！」

唯「そうよ！明久はブサイクじゃなんかじゃないわ！成績だって去年は最低だったけど、今の明久はBクラス並みの頭脳よ！」

確かに……明久の去年の成績は最低だった。

しかし、去年のある日、明久の頼みで僕と唯が勉強を教え、生活の改善をサポートしていた。

そのおかげがあつて、明久の成績は徐々にだが向上し、食生活だって前は毎日3食、砂糖・塩・水・サラダ油だった生活も今は3食共にちゃんとした栄養のある食事を取るようになり、生活費もゲームや漫画に無駄遣いしないようになったのだ。

雄二「なるほど……。たしかに見てくれは悪くはないかもしれないな。俺の知り合いにも、明久に興味を持っている奴がいたはずだし」

明久「え！？それってd」

姫路&唯「それって誰ですかっ！？（誰なのよ！？）」

またもや明久が雄二に聞こうとしたら今度は姫路さんと唯によって遮られてしまう。

明久は悲しそうな目で僕の方を見詰めていた。

ごめん、明久……。こればかりは僕には助けようがない。

雄二「たしか、久保」

姫路&唯「久保……」

明久「……………（ゴクリッ）」

優「……………？」

はて？……………久保？僕が知る限りで、久保という名字のつく女性がこの学園にいたかな？

雄二「利光だったかな？」

久保利光 Aクラス所属 性別： （性別：男）

いやそれ異性ですらないよ……。

姫路&唯「……………ホッ」

明久「……………（ブワッ！！）」

優「お、漢泣き！？明久！そこまで声を押し殺して泣かなくても！！」

雄二「ああ……………そうメソメソ泣くな明久。なあに、半分は冗談だ」

優「いや待って雄二。残りの半分はなに？」

雄二「で、姫路。もう体調は問題ないのか？」

姫路「ええ。もうすっかり元気です」

唯「よかったわ。あの時本当に心配したのよ」

優「いや、あの3人共……？」

明久「ねえ！？なんで優の質問に答えてくれないの？！僕も気になる！！残りの半分は！？」

残りの半分……まさかその久保君は……いや、やめておこう。
その先は考えたら負けだと思う……。

福原「はいはい。その人たち静かにして下さいね」

福原先生が教卓を叩きながら注意してきたので真っ先に謝ろうとした。

優「あ、福原先生。すみません」

バキィッ！（教卓にヒビが入る音）

バラバラ……。 （教卓が無残にも崩れる音）

福原&優「……………」

……なんだろう？この気まずい雰囲気は？

軽く叩いただけで崩れる教卓……本日何度も思ったことが分からないほどだが、本当に最低の設備だ。Fクラスは。

福原「えー……替えを持ってきました。皆さんはしばらく自習して下さい」

そう言って気まずい雰囲気から逃げるように教室を出て行く福原先生。

その替えというのも、おそらくまともな物じゃないだろう……。

姫路「あ、あははは……」

その状況に姫路さんは苦笑し、雄二は欠伸し、唯は呆れていた。ただ、明久は何か真剣に考えた後、雄二の方に話しかけていた。

明久「雄二。ちょっといいかな？」

雄二「なんだ、明久？」

明久「……ここじゃ話にくいから、廊下の方で。あと、優も呼んで良いかな？」

雄二「優もか？俺は別に構わないが……」

明久「ありがとう」

会話の内容は所々しか聞き取れなかったが、何か内密の話みたいだ。

雄二と明久の方を見ていたら明久が僕の視線に気付いたのか、僕の方に向かってきた。

明久「優。ちょっと相談があるんだけど」

優「相談？さっきまで雄二と話していたことに関係があるの？」

明久「ここじゃ話にくいから、雄二と一緒に廊下で話していいかな？」

優「いいよ。明久の相談なら、なおさら断る理由がないし」

でも、なんで雄二と僕なんだろう？

唯や他の生徒には相談できないことなのだろうか？

そう疑問に思いながら、明久と雄二と一緒に教室から出る。

雄二「……で、明久。俺達に話ってなんだ？」

明久「2人はこの教室をどう思う？」

優「いやどう思うって……酷いとかいいようが……」

明久「雄二は？」

雄二「右に同じくだな。Aクラスと比べたら呆れてものが言えんな」

優「雄二もAクラスの設備を見たんだ」

雄二「ああ。システムデスクにリクライニング、個人エアコンやパソコン、冷蔵庫なんて何処のホテルだと思った」

明久「だよな。そう思うよね。で、僕からの提案なんだけど、折角2年生になったんだし『試召戦争』してみない？」

『試召戦争』、正式名称は『試験召喚戦争』。試験校である文月

学園にしかないクラス抗争。

科学とオカルトと偶然の産物『試験召喚システム』によって姿を現す、召喚者をデフォルメした姿の分身『召喚獣』同士を戦わせ、勝ったクラスが負けたクラスの設備を交換することができる。

優「『試召戦争』……？確かに……設備を良くするにはその方が手っ取り早いよね。となると、狙うのはEクラスかDクラス？」

明久「いや、Aクラスに挑もうと思ってる」

雄二「……何が狙いだ、明久？」

明久「クラスの設備の向上と姫路さんのためかな」

雄二「随分と正直に話すな」

明久「2人に誤魔化してもどうせカマをかけられるのが目に見えているからね」

優「……なるほどね。僕は賛成だよ。雄二は明久の提案をどう思う？」

僕が賛成してもFクラスの代表は雄二だ。

彼が明久の案に賛同してくれないとFクラスの生徒全員を僕と明久だけで動かすのは難しすぎるだろう。

雄二「まあ、どのみち俺の方から『試召戦争』をやろうと思っていたところだからな。今回は明久の案に賛成だ」

明久「あれ？雄二のことだから教室の設備に興味がないと思ったん

「ただ……違うの？」

雄二「違わなくはない。ただ、『試召戦争』をする理由は『世の中、学力だけが全てじゃない』ってことを証明したくてな」

優「じゃあ、そうと決まれば」

明久「『善は急げ』と言うよね」

雄二「やるか！」

優＆明久＆雄二「……『試験召喚戦争』を……！」

第四章：文月学園の2人の『観察処分者』

問 以下の問いに答えなさい。

(1) $4 \sin X + 3 \cos X = 2$ の方程式を満たし、かつ第1象限に存在する X の値を1つ答えなさい。

(2) $\sin(A+B)$ と等しい式を示すのは次のどれか、 $?$ $?$ $?$ の中から選りなさい。

$$? \sin A + \cos B$$

$$? \sin A - \cos B$$

$$? \sin A \cos B$$

$$? \sin A \cos B + \cos A \sin B$$

姫路瑞希の答え

$$\text{『 (1) } X = \pi/6 \text{ 』}$$

$$\text{『 (2) ? 』}$$

教師のコメント

そうですね。角度を『 $\pi/6$ 』でなく『 $\pi/6$ 』で書いてありますし、完璧です。

土屋康太の答え

$$\text{『 (1) およそ } X = 3 \text{ 』}$$

教師のコメント

およそをつけて誤魔化したい気持ちもわかりますが、これでは解答

に近くても点数は上げられません。

島田美波の答え

『(1) 』

『(2) 』

教師のコメント

無解答なのですが……まさか日本語の問題文で書かれたという理由で飛ばしましたか？

だとしたら、計算問題が得意な島田さんには非常に惜しいところです。

吉井明久の答え

『(1) $X \parallel 3 \cdot 14 / 6$ 』

『(2) 多分……? 』

教師のコメント

一応正解なのですが……先生は時折、君は本当にBクラス並みの成績なのかと疑問に思います。

水菜優の答え

『(1) $X \parallel 3 \cdot 1415926535897932384626433832795 / 6$ 』

*ちなみに と3・14は正確な円周率ではありません。あとはギリシア文字の1つです。

教師のコメント

何故、吉井君と同じで……しかもそこまで詳しく答えられるのですか？……せめて で表してください。あと、なんでそんな豆知識を書く必要があるのですか？

水菜唯の答え

『（２）問題の難しさに私が泣いた？！（よ！）』

教師のコメント

こんな解答の仕方なのに一応正解していることが悔しいです。

一度、教室に戻り福原先生が代えの教卓を持って戻ってきたと同時に自己紹介が再開された。

明久の提案で僕と雄二でＡクラスに『試召戦争』を挑むことになったが……問題は……このＦクラスをどうやって動かすかだ。

はつきり言つて、Ａクラスに挑むということ自体が、無謀かつありえないことなのだから。

クラスの皆がそう簡単にやる気になつてくれるとは思わない。

だが、そのことを雄二に話したが、『俺に任せとけ』っと、自信満々に僕達に言つてのけたのだ。

あれ程自信満々に言つたのだ。Ｆクラスを説得するのは雄二に任せることにした。

などと、思いふけていると雄二の自己紹介に入つたのだが、何故か雄二は教卓の前に立つたのだ。

雄二「Ｆクラス代表の坂本雄二だ。俺のことは代表でも坂本でも、好きに呼んでくれ。さて、皆に１つ聞きたい」

そういつて雄二は教室の設備の１つ１つを見渡し始めた。

雄二「Fクラスは見ての通り、教室は狭いしカビ臭いし、足の折れた卓袱台、腐りかけた畳、割れた窓ガラスなどなど酷い設備だ。ところが、Aクラスは広く空気は清潔、システムデスク、リクライニング、個人エアコン、パソコン、冷蔵庫などの最新設備完備なわけだが……」

そこで雄二は一息置いて、次の言葉を言い放つ。

雄二「……不満はないか？」

Fクラス『『『『『『『『大ありに決まっているだろうがあああああああああ！！！！！』』』』』』』

一瞬にしてFクラス（一部を除いた）の魂の叫び声が響いた。
そりゃあ、この設備に不満のないということ自体がおかしいだろう。

雄二「だろう？俺もこの現状には大いに不満だ。Fクラス代表として問題意識を抱いている」

わざとらしい雄二の言葉を引き金にFクラスから不満の声が拳が
つてくる。

須川『そうだ！そうだ！』

Fクラス男子C『いくら学費が安いからと言って、この設備はあんまりだ！改善を要求する！』

Fクラス男子D『そもそもAクラスや他のクラスも同じ学費だろ？

あまりに差が大きすぎる!」

Fクラス男子B「姫路さん付き合ってください!」

Fクラス男子E「唯さん!結婚してください!」

誰かも分からない2名を除いてだが……。

雄二「これは代表としての提案だが、FクラスはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う!」

雄二の言葉にFクラスの生徒達が騒ぎ出した。

須川「勝てるわけがない」

Fクラス男子D「これ以上設備を落とされるなんて嫌だ」

Fクラス男子B「姫路さんがいたら何もいらない」

Fクラス男子E「唯さん!結婚してください!」

まあ……予想した反応と声が拳がってくるわけだが、あとの2名はなぜラブコールを送っているのだろうか?最後の1人はさっきと同じことを言っているのだが……。

雄二「そんなことは無い。必ず勝てる。いや、俺が勝たせて見せる!」

須川「何を馬鹿なことを」

Fクラス男子D『できるわけ無いだろう』

Fクラス男子C『何の根拠があつてそんなことを』

確かに……根拠がなきゃそんなこと言えるはずがない……。

まあ……少なくともFクラスには上手くいけばBクラスも倒せるのも夢でない程の戦力が揃っているのだが。

雄二「根拠ならあるさ。このクラスには試験召喚戦争で勝つことのできる要素が揃っている。それを今から教えてやる。おい、康太。畳に顔つけて姫路のスカートの中を覗いてないで前に来い」

優&明久&唯「……え?」「」

康太「……………!!(ブンブン!)」

姫路「は、はわっ!」

姫路さんの席に顔を向けると、確かに康太が彼女のスカートの中を覗こうと顔を必死に畳につけながら覗こうとしていた。

雄二によって気付いた姫路さんは慌ててスカートを抑えながら康太から距離を置く。

なにやっているの康太。前から言っているけどそれは犯罪だから! あわよくば警察に突き出されるから、普通は!

康太は雄二に呼ばれたからすぐさま教卓の方に向かい、こちらに顔を向ける……。

但し、顔を両手で覆い隠しながら……。まあ、あれだけ畳に顔をへばり付けていたのだから畳の跡が残るのは当然といえば当然だ。しかも隠しきれっていない……。

雄二「土屋康太。こいつがあ有名な、『寡黙なる性識者』（ムツツリーニ）だ」

康太「……………！！（ブンブン）」

今度は雄二が康太自身のあだ名に対して首を横に振るい否定する。顔を隠しながら……………。

土屋康太。本名自体はそれほど有名ではない。しかし、『寡黙なる性識者』（ムツツリーニ）はかなり有名だ。

その名は男子からは畏怖と畏敬を、女子からは軽蔑を以ってあげられている程なのだから。

須川『ムツツリーニだと……………！！？』

Fクラス男子B『馬鹿な……………！！奴がそうだというのか？！』

Fクラス男子E『だが……………見る。あそこまで明らかな覗きの証拠を未だに隠そうとしているぞ……………？』

Fクラス男子D『ああ。ムツツリの名に恥じない姿だ……………』

康太の登場で教室に戦慄が走る。しかし……………。

姫路「???」

約1名を除いて。純粹すぎる彼女に康太のあだ名の意味が理解できないのだろう。

雄二「姫路のことは説明するまでもないだろう」

姫路「え？わ、私ですか？」

雄二「ああ。皆だってその力はよく知っているはずだ」

彼女はFクラスの『試験召喚戦争』において重要な戦力であり、
とっておきの切り札だ。

Aクラス実力者の彼女ならそうそう負けることなどありえないはずだ。

須川「そうだ！俺達には姫路さんがいるんだった！！」

Fクラス男子D「彼女ならAクラスにも引けをとらない！」

Fクラス男子B「ああ。彼女さえいれば何もいらなないな」

さっきから誰なんだろう？姫路さんに熱烈なラブコールを送っている人は……？

雄二「木下秀吉だっている」

演劇部のホープにして、演技のプロと言える秀吉。彼の演技は何度も見たが、見事なものとししか表現ができない。

須川「おお……！！」

Fクラス男子C「ああ。アイツ、確か木下優子の……」

雄二「当然、俺も全力を尽くす」

Fクラス男子B「確かに。なんだかやってくれそうな奴だ」

須川『坂本って、小学生の頃は『神童』とか呼ばれていなかったか？』

Fクラス男子D『それじゃあ、振り分け試験の時は姫路さんと体調不良だったのか？』

Fクラス男子C『だとすれば、FクラスにはAクラスレベルが2人もいるってことだよな！』

確かに雄二の話では小学生の頃は『神童』と呼ばれていたが……いや、ここは黙っておこう。

折角のテンションを下げるわけにはいかない。

雄二「それに、吉井明久に水菜兄妹がいる」

Fクラス『『『『『『………』』』』』』

雄二はFクラスに、凍て付く波動を放った。Fクラスにかかった補助効果が消え失せた。

って、何故にドク風に解説してるんだろう、自分。

先ほどのテンションが嘘のように一気に下がってしまった。

まあ、僕達は雄二達と違って有名じゃないからね……多分。

しかし、僕の思いと裏腹にFクラスに再びテンションが拳がり始めた。

須川『誰だ？吉井に水菜兄妹って？』

Fクラス男子D『いや、ちょっと待て！吉井に水菜兄妹だと?!』

Fクラス男子C『確か……吉井は去年とんでもなくバカだったが、今ではBクラス並の成績を持ってると噂で聞いたぞ!!』

Fクラス男子B『それなら水菜兄妹だって同じ筈だぞ?!姫路さんがFクラスに来た理由は分かったが、何でそいつ等もFクラスにいるんだ?!』

Fクラス男子E『スゲエ!!これならAクラスにだって勝てるかもしれない!!』

先ほどのテンションよりもヒートアップするFクラス。

もしかして雄二はこれを見込んで敢えて僕達のことを最後に紹介したのだろうか?

だとしたら、『神童』の名は今だ健在なのかもしれない。

雄二「もう気付いている奴もいるが、明久と水菜兄妹はBクラス並の実力だ。いや、それだけじゃない。明久と優にはこの学園では有名な肩書きがある」

……え?まさか雄二!僕達のあの肩書きを言うつもりなのか?!
これはなんとしても阻止しないと!!

明久&優「雄二!!それは言わないd」

雄二「明久と優。この2人の肩書きは『観察処分者』だ!」

ああ……僕達の制止は空しく失敗に終わってしまった!

須川「ちょっと待ってくれ、坂本。『観察処分者』って、確か『バ

力の代名詞』じゃないのか？なんで吉井と水菜がそんな肩書きを持っているんだ？」

雄二「俺も詳しくは分からない。ただ、去年明久と優がバカやってそんな肩書きを持ってしまったのは事実だ。そのところどうなんだ？明久に優？」

明久&優「も、黙秘します……」

雄二「つとまあ、この一点張りでなにも話そうとしない」

そりゃあ……ねえ？あれは誰にも話さないと明人と一緒に決めたのだから……。

例え、血の繋がった妹でも話すわけにはいかない。

姫路「あの、それってどういうものなんですか？」

そう言って姫路さんは首を傾げていた。

まあ、学年順位2位の成績を誇る彼女には馴染みのない言葉なのだろう。

明久「ええつと……ね。『観察処分者』というのはさっき須川君の言うとおり『バカの代名詞』。本来、召喚獣は召喚獣以外触れることができないけど、『観察処分者』の召喚獣は教師の雑用を行う為に特例として物を触れることができて、それを操る人の事を言うんだ」

姫路「そうなんですか？それって凄いですね。試験召喚獣って見た目と違って力持ちって聞きましたから、そんなことができるなら便利ですよ」

優「一見聞けばね。だけど、そもそも召喚獣は教師の立会いの下じやなきや使えない。つまり、自分のために使うことなんてそうそうできない。それに『観察処分者』用の召喚獣は生徒の罰みたいなものだから、召喚獣が受ける痛みや疲労の何割かが召喚者にフィートバックする。だから、メリットよりデメリットの方が大きいんだよ」

どれ位痛いかというと……召喚獣が全力で走って壁にぶつかったとする。

その何割かが返ってくると想像すればどんなに痛いか想像できるだろう。

須川「おいおい。『観察処分者』ってことは『試召戦争』で召喚獣がやられると本人も苦しいってことだろ？なら、おいそれと召喚できないじゃないか？」

明久「負ければね。だけど、僕達の成績は、皆知つてのとおりだよ？そうそう負けることなんてない。それに僕達には他の皆にはないメリットがある」

須川「メリット？『観察処分者』にメリットなんてあるのか？」

優「それがあるんだよね。皆も1年生の頃にも召喚獣の実習操作してたよね？と言っても、どれも基本的なことだから、歩いたり走ったり攻撃したり防御したりの基本しかできないはず。悪く言うと召喚獣の操作に不慣れなんだよ。でも、『観察処分者』は召喚獣を操る機会が多い上に物を持ち上げたり運んだりしているから、精密な操作が可能なんだよ」

姫路「ええっと、具体的にはどんなことが出来るのですか？」

んだし」

唯「ちょっと待って、優兄。それならアタシもその条件に当てはまるよ?」

優「……兄が妹をそんな危険なことさせると思っ?」

雄二「まあ……お前がそこまで言うなら行かせるしかないな。開戦は今日の午後にでもしてくれ」

優「了解」

僕は雄二にそう言って、Fクラスの教室を出てDクラスに向かった。

第五章：彼の人柄の良さと人望はクラスの皆、知っている

問 以下の文章の（ ）に正しい言葉を入れなさい。

『光は波であつて、（ ）である』

姫路瑞希の答え

『粒子』

教師のコメント

よくできました。

土屋康太の答え

『寄せては返すの』

教師のコメント

君の回答はいつも先生の度肝を抜きます。

吉井明久の答え

『希望』

教師のコメント

ある意味間違つてはいませんが、この問題の答えとしては間違いです。

水菜優の答え

『得体の知れないにか』

教師のコメント

前の説明文を完全に否定していますね。

水菜唯の答え

『女性のお肌の天敵である紫外線を放射しているの』

教師のコメント

コンビニなどで日焼け止めクリームなどの購入をお勧めします。

優「失礼します！」

Dクラスに宣戦布告するためにFクラスの使者としてきた僕はさつそくDクラスの教室に来ていた。

最初に僕に気付いて話しかけてきたのは三つ編みの女の子だった。

玉野「あれ？あなたは……水菜君？」

優「はい！ええつと……君は？」

玉野「あ、私は玉野。玉野美紀です」

優「ご丁寧にどうも。水菜優です。すみませんが、Dクラス代表の平賀君を呼んでくれませんか？」

玉野「代表をですか？はい、構いませんよ。平賀君！ちょっと来てくれる？」

玉野さんの声にDクラス代表の平賀君が反応してくれた。

平賀「どうしたの、玉野さん？あれ、君は水菜君じゃないか。Bクラスが俺に何の用かな？」

優「はい。Fクラスの使者としてDクラスに宣戦布告に来ました！」

平賀＆玉野「……はい？君がFクラスだって?!」

2人は僕の言葉に心底、驚いたって……あの？
驚くべき所はそこなの？

優「いやいやいや……。驚くべき所はそこじゃないでしょ？」

平賀「いや、確かにFクラスが宣戦布告に来たことは驚くべきところだが!!それより君がFクラスだって!？」

優「そんなに驚くことかな？」

玉野「驚くわよ！成績はBクラス並み！誰に大しても優しく、自身の自慢をしたりしない！生徒の鑑といえる水菜君がFクラスだなんて!」

はて？確かに困っている人の手伝いは1年生の頃からしてたけど……そんなの自慢にもならないし。

勉強だって自分のためにやっているようなことだから、ごく当たり前のことだと思うんだけど？

優「あの……宣戦布告についてなんだけど……。『試召戦争』は、今日の午後でいいかな？」

平賀「あ……ああ。それで構わないけど」

優「そう？ありがとう」

平賀「……………」

玉野「……………」

優「……………？あの……。襲ったり何もしないの？」

玉野「え……………」

優「いや、だって……FクラスがDクラスに宣戦布告したんだよ？下位勢力の使者って、酷い目に遭う筈だよな？」

平賀「いやいやいや！？他の使者ならそうするかもしれない……。君が使者なら話は別だ。そんな乱暴なことなんてできない！！」

はて？平賀君はなんでそんなに謙遜するのだろう？

僕、なにかした？

優「じゃあ、僕はこれで。もちろんFクラスはDクラスに勝ちに行くから。お互い全力を尽くそうね」

そう言い残し、Dクラスを後にし、Fクラスに戻ることにした。

明久「あ……優！Dクラスの連中に酷い目に遭わなかった？！」

唯「優兄！大丈夫！？怪我とかしていない！？」

Dクラスから戻ってきた僕を出迎えてくれたのは明久と唯だった。
2人とも……そんなに心配してくれたんだ。

優「大丈夫だよ、2人とも。寧ろ、何故か謙遜されて襲ってこなかったよ」

明久「え？そうなの？」

雄二「明久、優の人望の良さは知っているだろ。大方、Fクラスにいることの方に驚いたんだろ？」

優「よく分かったね……雄二。その通りだよ」

雄二「それじゃあ、お昼ご飯も兼ねてミーティングに行くぞ」

雄二は鞆を持って教室を出ようとする。

唯「つて、坂本君？どこに行くの？ここで食べないの？」

雄二「こんなかび臭い教室で食ってたら飯がマズくなる。屋上の方がいいだろ？」

優「……確かに。それじゃあ行こうか」

明久「じゃあ僕も」

美波「ウチも行くわ」

唯「アタシも」

秀吉「ワシもじゃ」

康太「……………（コクコク）」

姫路「あ、私も行きます！」

総勢8人で、屋上に向かうことになった。

その途中、康太が自分の頬を擦っていたが、恐らく顔についていた畳の跡を気にしているのだろう。

まあ、かなり時間が経ったから跡は綺麗に消えているけど……。

康太「……………（サスサス）」

明久「ムツツリーニ。覗いていた時の畳の跡ならもう消えてるよ?」

康太「……………！（ブンブン!）」

明久の言葉に首を横に振って否定する。

明らかに覗きの事実が明確なのに、まだ否定している……。

優「いや……………今更否定されても、隠し通せないと思うんだけど」

康太「……………！（ブンブン！）」

明久「ここまでバレているのに否定し続けるなんて……………ある意味凄いと思う」

康太「……………！！（ブンブン！！）」

明久＆優「……………何色だった？」

康太「水色」

即答ですか……………。

明久「やっぱりムツツリーニは、色々な意味で凄いよ」

康太「……………！！！！（ブンブン！！！！）」

美波「ほら、吉井に土屋に水菜。喋ってないで、きりきり歩く」

明久「あー、はいはい」

美波「返事は1回でしょ？」

明久「へーい」

美波「……………一度、D a s B r e c h e n……………ええっと、日本語だと」

康太「……………調教」

いや、調教って……。島田さん、あなた明久に何か恨みでも……？

優「でも、康太。よく今のドイツ語を訳せたね」

康太「……………一般教養」

そんな一般教養は今すぐドブ川に捨てるべきだと思う。

明久「調教って……………せめて、教育とか指導って言ってくれない？」

唯「そんなことアタシがさせない！別に吉井のこと心配してるんじゃないからね?!」

美波「じゃあ、中間をとって……………Zuchting」

康太「……………それは分からない」

姫路「あの……………それって、日本語だと折檻だったと思うのですが?」

康太の代わりに姫路さんが答えてくれる。

それはそうと、島田さん……。

優「それは調教より酷いよ……………」

唯「……………島田さん。死ぬ覚悟は出来てるかしら?」

美波「じよ、冗談よ冗談!」

その割には目が泳いでいるのですが……。

雄二「おい、お前等。会話もいいが着いたぞ？」

優「あれ？もうそんなに歩いたんだ」

気付いたら屋上のドアの近くまでいた僕達。

会話の方に集中してたから、全然気付かなかった……。

雄二が先導してドアを開けるとそこは青空が広がるとても広い場所だ。

まあ、屋上なのだから当たり前なんだけど。

雄二「それで、優。ちゃんと宣戦布告はしてきたな？」

優「もちろん。今日の午後には始まるはずだよ」

今頃、DクラスはFクラスの宣戦布告に驚きを挙げているはずだ。

秀吉「そうなるとお昼が先じゃな」

雄二「まあ、そうなるな」

明久「あの……ごめん、優。おかずを少し分けてもらえないかな？」

優「え？別に構わないけど……明久、弁当は？」

明久「今月の食費がやばいんだ。なるべく節約しないと……」

唯「とかいいながら……またゲームに費やしたんでしょ？」

明久「違うよ！毎食作るのに張り切りすぎて、つい高価な食材ばっ

かり買ったから……」

金欠になってしまったと……。

優「まあ……来月の仕送りまで僕が明久の分、作ろうか？」

明久「え！？そんな悪いよ！優はただでさえ唯の分まで作ってるのに！」

優「でも……折角、明久の胃が人並みに回復してるのに仕送りまで我慢させられないよ」

姫路「あの！で、でしたら……私が吉井君の分のお弁当を作ってくださいようか？」

明久「え？」

秀吉「明久、字がおかしくなっておるのじゃ」

意外だ……。姫路さんはもっと控えめな方だと思ってたけど、大胆な行動に出た。

明久「あの、姫路さん？いいの？」

姫路「は、はい！吉井君さえよければ……」

美波&唯「……ふん？瑞希（姫路さん）って、随分と吉井に優しいわね？」

明らかに不機嫌そうな2人が姫路さんをジト目で見つめる。

姫路「あ、いえ！その……皆さんにも」

雄二「俺達にもか？いいのか？」

姫路「はい！皆さんさえよければ」

秀吉「それは楽しみじゃな」

康太「……………（コクコク）」

美波&唯「……………お手並み拝見ね」

確かに……姫路さんの弁当を見る限りとても美味しそうだ。

女の子の手料理なんて一生に一度しかないかもしれない。

雄二「さてと、大分話が逸れたが、そろそろ『試召戦争』の作戦会議をするか」

秀吉「雄二。1つ疑問に思うことがあるのじゃが、どうしてDクラスなんじゃ？段階を踏んでEクラスではないのかの？」

雄二「ああ。理由は簡単だ。戦うまでもない相手だからな」

美波「でも、坂本。EクラスはFクラスより上じゃない？」

明久「簡単な話だよ、島田さん。確かに事実上Eクラスが上だよ。でも、この場にはEクラスには負けない戦力がある。雄二はそれを見越してEクラスには勝負を申し込まないと判断したんだよ」

優「それに最初からAクラスに挑もうとしなかったのは、いきなりの初陣で、しかも作戦なしで挑もうなんて無鉄砲すぎるから。それこそ負けに行くようなもんだよ」

雄二「もう1つは初めての『試召戦争』でFクラスを景気付けけるのも目的だ。とにかく、Eクラスを攻める必要はない」

唯「……あれ？それならDクラスに勝てるのは厳しいの？」

雄二「正直なところはな。だが、Dクラスに勝つことは、打倒Aクラス作戦のためのプロセスになる。そして、お前等が俺に協力してくれるなら勝てる！いいか、お前等。俺達のクラスは……最強だ」

美波「それを聞いたら、ますますDクラスに勝たなきゃね」

姫路「はい！頑張りますよー！」

秀吉「ワシも全力を尽くすのじゃ」

康太「……任せておけ（グッ！）」

優「僕は最初から勝つつもりで行くよ？」

唯「アタシの実力。見せつけてやるわ」

明久「Fクラスの底力を見せつようー！！」

雄二「よし！それじゃあ、まずは作戦を説明するぞ」

僕達FクラスがDクラスに勝利するための作戦を静かに聞き、お

昼休みを終えたのだった。

第六章：開戦！ Fクラス VS Dクラス ～前編～（前書き）

蒼き演奏者「お久しぶりです。ただ今スランプ中の『蒼き演奏者』です……。ようやくFクラス対Dクラス戦の前編が書けました。長いこと楽しみにさせていた方や初めての方も、深くお詫び申し上げます……。それでは、本編の方をどうぞ……」

第六章：開戦！ Fクラス VS Dクラス 〔前編〕

問 以下の問いに答えなさい。

『ベンゼンの化学式を書きなさい』

姫路瑞希の答え

『 C_6H_6 』

教師のコメント
簡単でしたかね。

水菜優の答え

『 C_6H_6 』

教師のコメント
正解です。そういえば君は化学が得意でしたね。

吉井明久の答え

『 C_3H_6 ?』

教師のコメント
非常に惜しいです。それは『プロピレン』の化学式です。
正しくは『 C_6H_6 』です。

島田美波

『Benzol』

教師のコメント

ドイツ語ではなく化学式で答えてください。

水菜唯の答え

『H₂O』

教師のコメント

どこをどう考えたらその答えに辿り着いたのか一時間程問い詰めた
いです。

土屋康太の答え

『ベン+ゼン=ベンゼン』

教師のコメント

君は化学をなめてはいませんか。

坂本雄二の答え

『B + E + N + Z + E + N = BENZEN』

教師のコメント

あとで土屋君と一緒に職員室に来るように。

Fクラス男子D「水菜隊長！Dクラスの奴ら、高橋先生だけでなく、
さらに五十嵐先生と布施先生を連れてきやがった！」

雄二の指示により、僕はFクラスの先攻部隊の隊長に任命され、現在Dクラスの先攻部隊と攻防を繰り返している。副隊長は秀吉だ。僕のさらに後ろには中堅部隊が待機しており、隊長が明久で副隊長は島田さんとなっている。

雄二と姫路さん、唯、康太は本陣（教室）に待機している。

優「なるほど……一気に突破するつもりだね。総員に通達！！これより先攻部隊は防戦に移行する！！五十嵐先生と布施先生側の人で化学に自信のある人は、なるべく敵の攻撃を防ぐのではなく回避する！高橋先生側の人や他の人は、必ず二対一での戦闘を！！点数がやばくなったら、近くの人と交代して点数を回復しに行く！！それすらできないなら、回避に専念して戦闘を長引かせるんだ！！あくまで僕達の目的は前線維持！！深追いはしないように！！」

Fクラス男子
了解！！！！

僕の指示に先攻部隊全員が従ってくれる。

Dクラス先攻部隊の数は僕達先攻部隊と比べれば若干少ない。

しかし、Fクラス生徒個人の成績はDクラス生徒個人の成績と比べれば点数差は大きい。

すでに僕達先攻部隊の人数は、戦闘開始の10分前より徐々に減ってきている。

西村「さあ来い！この負け犬が！」

Fクラス男子G「で、鉄人！？嫌だ！補習室は嫌なんだっ！」

西村「黙れ！捕虜は全員この戦闘が終わるまで補習室で特別講座だ！終戦まで何時間かかるかわからんが、たっぷりと指導してやるか

らな」

Fクラス男子G「た、頼む！見逃してくれ！あんな拷問耐え切れる気がしない！」

西村「拷問？そんなことはしない。これは立派な教育だ。補習が終わる頃には趣味が勉強、尊敬するのは二宮金次郎、といった理想的な生徒に仕立て上げてやろう」

Fクラス男子G「お、鬼だ！誰か、助けっ
イヤァァ
（
ボタン、ガチャ）」

……ああ、また一人、西村先生の特別講義の餌食に……。

あと、西村先生。それはもはや教育ではなく洗脳ですよ……。

召喚獣の点数が一教科でもゼロになれば、その生徒は戦闘に負けたことになり、問答無用で西村先生の城ともいえる『補習室』に連行される。

僕は入ったことがないため、特別講習の内容は知らないのだが、Aクラスの生徒ですら恐怖するほどの体験が待ち構えているという噂が流れているほどだ……。

実に知りたくない……。

などと考えていると僕の元に駆けてくる秀吉の姿が見えた。

優「秀吉？どうしたの？」

秀吉「すまぬ、優……。戦死は免れたのじゃが、かなり点数が削られてしまったわい」

優「召喚獣の様子は？」

秀吉「もうかなりへ口へ口じゃな。これ以上の戦闘は無理じゃ」

……参った。先攻部隊戦闘員の中で二番目に点数が高いはずの秀吉の召喚獣がこれ程までに追い詰められるとは……。秀吉も抜ければ、今の人数だけで前線維持は厳しいかもしれない。

優「秀吉。教室に戻るのなら明久達に援軍をお願いしてくれないかな？その間まで何とか前線を維持するよ」

秀吉「了解じゃ。なるべく急ぐように言っておくのじゃ」

そう言つて、秀吉は明久達のいるFクラスのある教室まで走っていく。

その後が続いて何人かのクラスメイトが秀吉の後に続いて戦線を離脱していく。

???「今だ！水菜の周りには護衛がない！叩くなら今しかない！！」

秀吉の姿が見えなくなった直後に背後から誰かの声が聞こえ慌てて振り向いた。

すると、Dクラスの生徒である三人がこちらに向かって突撃してきた。

あれは……。Dクラスで有名な『仲良し三人組』の山田君と中井君に横宮君だ！

どうやら、秀吉が居なくなるタイミングを見計らっていたのだろう。

山田「彼はBクラス並みの成績の持ち主だ！先手必勝！三人で一氣に畳み掛けるぞ！！布施先生！Dクラスの山田武史！行きます！！」

中井「同じくDクラスの中井謙也！水菜君に試獣召喚を行います！」

横宮「横宮金次郎……親友達の義に従い……水菜氏のその首、討ち取らん！」

優「奇襲？！布施先生！Fクラスの水菜優！試獣召喚に応じます！」

山田＆中井＆横宮＆優「……試獣召喚！（サモン！）」

僕達の喚び声に応じてそれぞれの足元に幾何学的な魔法陣が現れる。

僕の喚び声の方が一歩早かったのか、僕専用の召喚獣が姿を見せ始める。

足首の丈まである青いローブを着込み、左手に銀色で盾を持った僕に似た召喚獣。

動きやすいようにローブのチャックは全開に開いており、盾の中心には青く平たい宝石に白い大きな文字で『F』と書かれている。

僕は召喚獣が完全に姿を現した瞬間に、山田君の召喚獣が現れるその場所に召喚獣を一気に駆けさせる。

山田「な、速い！？」

優「遅い！！」

加速の勢いを乗せた右腕で山田君の召喚獣にボディーブローを喰らわせる。

怯んだ瞬間、さらに5発ぐらい連撃を食らわせた後、両手で盾を振り上げ、山田君の召喚獣の頭に目掛けて振り下ろす！

山田君の召喚獣は顔面から廊下に叩きつけられ、動かなくなる。それと同時に、それぞれの召喚獣の頭上に点数が表示される。

『Fクラス 水菜優 VS Dクラス 山田武史&中井謙也&横宮金次郎』

化学 314点 VS 0点

89点 94点

中井&横宮「なにいいい！？（なんとおおお！？）」「

山田「ば、バカな！？300点オーバーだ！？明らかにAクラス並の点数じゃないか？！」

優「ごめんね。化学は結構得意な方だから」

あと、化学ほどではないが数学も得意な方だ。

西村「戦死者は補習！！」

山田「ゲッ！？て、鉄人？！中井、横宮！助けろ（ガシッ！）イヤ
アアアアアア （ボタン、ガチャ）」

山田君は他の二人に助けを求めようとしたが、西村先生の豪腕に捕まり、補習室に連行されてしまう。

……しかし、西村先生。貴方は先程まで補習室にいたのでは？
どうやって山田君の戦死に気が付いたのだろう……。

中井「武史君……！！ど、どうする！？金次郎君！どうやって

も僕達に勝ち目なんか……」

横宮「諦めるでない！！武史氏の死……無駄にするでない！！」

いや死んでないから！！……ある意味、地獄に連れて行かれたけど……。

優「悪いけど、Fクラスの勝利のために速攻で倒させてもらおうよ！！」

そう言っ僕は召喚獣の左手に持っている盾を前に構える。
そして、盾の周辺に青色の丸いエネルギー弾を22個形成させる。
最初の1発ずつは彼らの召喚獣の足元に撃って避けさせる。

その瞬間に10発ずつをそれぞれの召喚獣に先程のエネルギー弾より倍の速度で一気に叩き込んだ。

『Fクラス	水菜優	VS	Dクラス	山田武史&中井謙
也&横宮金次郎』				
化学	314点	VS		0点
0点		0点		

ちなみに僕の召喚獣は守備型というちよつと特殊な召喚獣だ。

他の召喚獣と違い耐久力が高く、並みの攻撃では一桁ぐらいのダメージしか与えられない。

おまけに機動力も高いので相手の攻撃はそう簡単には当たらないだろう。しかし、デメリットもある。

僕の召喚獣は耐久力が優れている分、攻撃力が低い。先程のエネルギー弾は1発で10点分の威力だ。

盾などの直接攻撃だとさらに攻撃力が低いのが難だ。

オマケに僕の召喚獣は『観察処分者』仕様だから、素手での攻撃や相手の攻撃を受けてしまえば何割かが痛みとしてフィートバックしてしまう。

ハッキリ言えば、攻撃向きではなくサポート向きの召喚獣だろう。

横宮「つ、強すぎる!!」

中井「金次郎君！早く逃げないと鉄人が!!」

西村「戦死者は補習!!」

横宮&中井「（ガシッ！ガシッ！）イヤアアアアアアアアアア
!!!!（ボタン、ガチャ）」

断末魔の叫び声を挙げながら西村先生の両腕で軽々と持ち上げられながら連行されていく中井君と横宮君の声が耳に響いていく……。

……なんだろう、この罪悪感……。

負かしたのは僕だけど……さすがに可哀想になってきた。

いや、しっかりしろ水菜優!!僕は隊長なのだから皆を導く義務があるんだから!!

???『あつ、そこにいるのはもしや、Fクラス的美波お姉さま！
五十嵐先生、こっちに来て下さい!』

美波『くっ！ぬかつたわ!』

心の中で自分自身に喝をいれていると、一人の少女の声と島田さんの声が聞こえた。

島田さんの声が聞こえたということは……明久率いる中堅部隊が

来てくれたということだ！

後方に目を向けると、ものすごい勢いでこちらに向かってくる集団が見えてきた。

横田「全員突撃しろー！」

ただ……横田君が明久達の代わりに全員に突撃命令しているのは……何故？

横田「水菜隊長！ご無事ですか？」

優「うん、僕は無事だよ。でも横田君、どうして君が指示を？明久達は？」

横田「島田副隊長がこちらに移動中、Dクラスの女子生徒に試獣召喚を申し込まれたようなので、急遽、僕が皆に指示をするように吉井隊長に言われました」

ということとは、島田さんと一緒に明久もその場に残り、横田君は明久に臨時で指示をするように言われたのか。

明久も居るんだから心配の必要はないのかもしれないけど……なんか妙に気になる。

優「横田君、僕は明久達を迎えに行くからしばらくの間、皆の指揮をお願い！」

僕は横田君達にそう告げて、明久達のいる方角に駆け始めた。

横田「え！？は、はい！お気を付けて！！」

横田君は僕の行動に驚いたものの、すぐに僕の指示に従ってくれた。

島田さんの声からしてそう遠くには居ないはずだ。

全速力で走る僕の前方に島田さんと明久とDクラスの女性の姿に五十嵐先生が見えた。

既に召喚獣は召喚されており、島田さんの召喚獣は青色の軍服姿にサーベルを持っている。

一方、相手の子はロリカ・セグメンタタと言われる鎧にグラディウスという剣を構えていた。

「???」お姉さまに捨てられて以来、美春はこの日を一日千秋の想いで待っていました……」

美波「ちよっと！いい加減ウチのことは諦めてよ！」

美春さんというDクラスの女の子、清水さんは島田さんに何故か熱烈な視線で見つめ、それを島田さんは何か拒絶するような態度で睨み合っていた。

……あの2人、一体どういう関係なんだろう？

優「明久！」

明久「え……優！？無事だったんだね！！前線の方は？」

優「今のところ、明久達の援軍の御陰でしばらくの間は維持できそうだよ。それより、明久。あの2人はどういう関係なの？」

明久「さあ？一体どういう関係なんだろう？」

明久に2人の関係を聞いてみたが、明久の方も詳しくは分からないみたいだ。

明久「島田さん、お姉さまって」

美春「嫌です！お姉さまはいつまでも美春のお姉さまなんです！」

美波「来ないで！ウチは普通に男が好きなの！」

美春「嘘です！お姉さまは美春のことを愛しているはずです！」

美波「このわからずや！」

……なるほど……。2人の会話から察するに、どうやら清水さんは同性愛者のようだ。

しかし、島田さんにはその気はなく、清水さんを拒絶しているが清水さんはそう簡単には引き下がってくれないみたいだ。

美春「行きます、お姉さま！」

2人の召喚獣の距離が詰まり、戦闘が開始される。

美波「はあああっ！」

美春「やあああっ！」

それぞれの召喚獣の武器が激しくぶつかり合い、力比べが始まる。

美波「こ　　のっ！」

美春「負けません！」

鏑迫り合いを繰り返している島田さんと清水さん。
だけど、この勝負は圧倒的に島田さんが不利だ。

明久「島田さん！向こうの方は点数が高いんだから、真正面からぶつかったら不利だ！」

美波「そんなこと言われなくてもわかってるけど、細かい動作はできないのよっ！」

明久の言葉に島田さんが意識がそれてしまったのか、直後、均衡が崩れてしまう。

島田さんの召喚獣が持っていたサーベルは清水さんの召喚獣によって弾かれてしまう。

美春「ここまでですっ！」

美波「くうっ！」

島田さんの召喚獣はそのまま清水さんの召喚獣に押し倒され、剣を喉元に突きつけられてしまう。

それぞれの召喚獣の頭上には、点数がようやく表示された。

『Fクラス	島田美波	V S	Dクラス	清水美春』
化学	53点	V S		
4点				9

明久「ちよつとおお！？島田さんの嘘つき！本当は60点台もないじゃないか！」

美波「こ、今回はちよつと調子が悪かったただけよ！！」

優「いや調子が良くても60点台というのはどうかと思うよ……」

美春「その豚共！お姉さまに失礼ですわ！それはさて置き、お姉さま。勝負はつきましたね？」

そう言つて、僕達のことを豚呼ばわりした清水さんはさらに島田さんの召喚獣の喉元に剣を近づける。

この不利な状況……例えば点数差があらうと、僕と明久なら形勢逆転することも可能かもしれない。

しかし、島田さんは召喚獣の操作に不慣れだ。

下手に動けはそのまま喉元を突き刺され、補習室行きだ。

美波「い、嫌あつ！補習室は嫌あつ！」

美春「補習室？……フフツ」

補習室という名の地獄に連れて行かれる恐怖に取り乱す島田さん。しかし、そんな島田さんの反応に清水さんは楽しそうに笑い、島田さんの手を引っ張っていく。

て、あれ？清水さん？補習室はそつちじゃ……。

確か……そっちは保健室の方角では？

美春「ふふつ。お姉さま、この時間ならベッドは空いていますからね」

美波「よ、吉井に水菜、早くフオローを！なんだか今のウチは補習室行きより危険な状況にいる気がするの！」

そっだろうね、島田さん。危険な状況にいる気がするのは気のせいじゃないよ。

なんせ……。

美春「殺します……。美春とお姉さまの邪魔をする人は、全員殺します……」

尋常ではない凄い殺気をこちらに向かって放っているからね。

優「明久！卑怯かもしれないけど、ここは2人で攻めよう！」

明久「そうだね！卑怯かもしれないけど状況が状況だし、仕方ないよね！」

優＆明久「試獣召喚！（サモン！）」

僕達の掛け声に応じ、魔法陣からそれぞれの召喚獣が召喚される。僕の召喚獣は先ほどと変わらぬ姿で登場し、明久の召喚獣は黒の改造学ランに木刀といういかにも不良といわんばかりの召喚獣だ。一見、明久の召喚獣は弱そうに見えるが、この召喚獣の姿は去年の試験の点数で決まった装備なのだ。

しかし、今の明久はBクラス並の成績なのだから、見た目に騙さ

れると痛い目に遭うのだ。

美春「邪魔者は殺します！」

島田さんの召喚獣に邪魔されないためか、島田さんの召喚獣の手足に攻撃を加え動けないようにして、突撃してきた。

僕は素早くエネルギー弾を2つ程作り、清水さんの召喚獣の足元に向けて威嚇射撃する。

清水さんの召喚獣はジャンプしてそれを回避するが、それが狙い。空中では身動きが取れない無防備な状態にいる清水さんの召喚獣に明久の召喚獣の木刀が鎧を砕き、突き刺さる。

『Fクラス	吉井明久&水菜優	V S	Dクラス	清水美春』
化学	254点	314点	V S	
0点				

圧倒的と言える点数差で僕達は難なく清水さんに勝ったのだ。

美春「そ、そんな……。美春がこんな豚共につー！」

西村「戦死者は補習ー！」

美春「ハッ?！」

西村先生から逃げようと清水さんだったが呆気なく捕まってしまう。

美春「おのれ！その豚共！これで済むとは思わないでください！
月夜の日は背後に気をつけるんですね！！」

そんな捨て台詞を僕達に吐き、補習室に連れて行かれる。

……何だか、トンデモない子に目を付けられてしまった気がする。

明久「島田さん、大丈夫！？」

美波「あ、ありがとう。吉井、ウチは大丈夫よ」

明久「でも……島田さんは教室に戻って回復試験を受けに行ったほうがいいかもしれないね」

美波「どうしてよ？ウチはまだやれるわよ？」

優「島田さん、今この前線には高橋先生と五十嵐先生と布施先生しかいないんだ。島田さんが得意な数学勝負は高橋先生じゃないとできない。でも、学年主任は全科目で対応できるから、島田さんの不得意の古典なんか出されたら、即、補習室行きだよ？」

美波「うっ！それは確かにそうね……」

明久「おまけに高橋先生を避けても、五十嵐先生と布施先生は化学教師だから、今の島田さんの点数じゃ……」

狙ってくださいと言わんばかりの格好の獲物だね……。

美波「……分かったわ。でも、吉井、水菜、ウチの分までがんばってよね？」

明久「もちろん！島田さんの分までがんばってみせるよ！って、島田さん？顔が赤いけど……？」

美波「な、なんでもないわ！！」

明久の笑顔を見せられた島田さんはちよつと照れくさそうにしたことを明久に指摘され、明久から顔をそらす。

まあ、あんな屈託な笑顔を至近距離で見せつけられたら恥ずかしくもなるよね。

特に……恋する乙女には……。

須川「吉井隊長！？それに島田に水菜隊長まで……どうしてこんな所に！？」

そんな僕達の姿に驚いた声を挙げたのは同じFクラスの須川君だ。

明久「須川君！ちょうど良かった。島田さんの召喚獣がボロボロになったんだ。また襲われるかもしれないから、本陣まで島田さんのボディーガードをお願いできないかな？」

須川「あ、ああ。了解。2人はどうするんだ？」

優「このまま前線に戻るよ。さすがに横田君だけじゃ皆の指揮を執るのは大変だと思うし……」

今更だが、僕は横田君に大変な大役を押し付けてしまったのに後悔してしまう。

一時的とは横田君だけではあのFクラスを統一するのは大変だ。

優「それと、須川君。本陣に戻るついでに、何か情報を聞いてきて

くれないかな？」

須川「それくらいならお安い御用だ。島田、行くぞ」

美波「了解。吉井、水菜。そっちは任せたわよ」

そう言って須川君と島田さんは教室へと戻っていく。

明久「優。僕達も早く前線に戻ろう！」

優「分かってるよ、明久！」

さあ、ここからが正念場だ！

何としてもDクラスの進行を妨げなければならないのだから。

僕達は自分達の戦場に全速力で走っていった。

第七章：開戦！ Fクラス VS Dクラス 〔中編〕

問 以下の問いに答えなさい。

『goodおよびbadの比較級と最上級をそれぞれ書きなさい』

姫路瑞希の答え

『good	better	best
bad	worse	worst』

教師のコメント
その通りです。

坂本雄二の答え

『good	gooder	goodest』
bad	bader	badest』

木下秀吉の答え

教師のコメント

まともな間違え方で先生は驚いています。

goodやbadの比較級と最上級は語尾に-erや-estをつけるだけではダメです。

覚えておきましょう。

吉井明久の答え

『bad	worsen	worsted』
------	--------	----------

教師のコメント

『悪い』『悪化する』『梳毛織物』

土屋康太の答え

『bad butter bust』

教師のコメント

『悪い』『乳製品』『おっぱい』

水菜唯の答え

『good bitter bast』

教師のコメント

『良い』『苦い』『靱皮』

…… 前回の問題で、Thisやmyですら訳せなかった人の解答とは思えませんね……。

水菜優の答え

『good batter beast』

教師のコメント

『良い』『打者』『獣』

……もしかして、君達はわざと間違えているのではないかと思えてきました……。

とは言え、この陣形でどこまで持つか……。

Dクラス男子E「Fクラスめ、明らかに時間稼ぎが目的だ！」

Dクラス男子A「何を待っているんだ！？」

僕達の戦い方にDクラスの連中が僕達の意図に気づき始めた。
これでさらにやりづらくなってくる。

Dクラス男子B「大変だ！斥候からFクラスに世界史の田中が呼び出されたって報告が！」

Dクラス男子A「せ、世界史の田中だと！？」

Dクラス男子E「Fクラスの奴ら、まさか長期戦に持ち込む気か！」

どうやら、Dクラスの偵察部隊に、Fクラスの採点にやってきた田中教諭が見つかったようだ。

世界史の田中教諭はおっとりとした初老の男性で、テストの採点の甘さには定評なのだが、採点には少々時間が掛かってしまう。

でも、長期戦に持ち込むならこれほど打って付けの人物はいない。

須川「吉井隊長に水菜隊長！Dクラスは数学の木内を連れ出したみたいだ」

先ほど、島田さんを本陣に連れていくまでのボディガードと情報を聞いてくるように指示した須川君が戻ってきて、僕達に報告してくれる。

それにしてもよりにもよって、木内先生か……。

木内先生は田中教諭と違い、テストの採点は厳しいが採点の早さ

は凄い。

どうやらDクラスはこちらの時間稼ぎに業を煮やし、一気にケリをつけるつもりようだ。

明久「須川君！」

須川「なんだ？」

明久は何か思いついたのか、須川君を呼ぶ。

明久「偽情報を流して欲しいんだ。時間を稼ぐために」

なるほど。戦力では不利でもせめて有利な状況を作ることとはできる。

そのための偽情報を流せば時間は稼げるかもしれない。
しかし……。

須川「偽情報？それは構わないけど、スグにバレるんじゃないか？
Dクラスで前線の指揮をとってる塚本は声大きいから、うまくいってもあつという間に混乱を収められてしまうぞ」

確かに須川君の言う通りだ。Dクラスの塚本君の声はこちら側に聞こえるほど大きい。

そのお陰で向こうの指示の内容は筒抜けなのだが、その分混乱に陥りにくい。

明久もその点は分かっているはずだ……。

いや、偽情報を流す対象はDクラスだけとは限らない。

優「教師に偽情報を流すつもりだね、明久」

明久「その通り！Dクラスは無理でも先生に流せばいい。他の場所に向かつてくれるように」

須川「……なるほど。それは確かに効果的だ。だが、直接職員室に行くのか？それだとDクラスの連中に見つかるかもしれんぞ？」

明久「それが問題だね……。見つかったら偽情報は流せなくなる……」

優「それなら放送室に行つて情報を流すのはどう？放送なら教師が何処にいても必ず聞こえるし、Dクラスの生徒と遭遇することはまずないよ」

須川「確かに。職員室よりリスクが少ない上、確実に偽情報を流せるな。内容はどうするんだ？」

明久「雄二に任せようと思う。雄二ならきっと先生を騙せる内容を考えてくれるはずだ」

須川「分かった。俺が情報を流すまで持ち堪えてくれよ！」

優「もちろん！須川君もDクラスに見つからないように気を付けてよ！」

僕は須川君にそう告げると、須川君は頷き、駆け足でこの場を離れていった。須川君はこういった参謀が好きなのだろうか？

ちらつと見た彼の表情はとても活き活きして見える。

明久「僕等是一对一じゃ勝てないからね！コンビネーションを重視してー！」

優「僕達先攻部隊は、明久達の中堅部隊のフォローにまわるんだ！
皆、点数は厳しいかもしれないけど、なんとしてもDクラスの進行
をここで食い止めるんだ！！」

僕達は指揮官として素早く全軍に指示を出す。

須川君が偽情報を流してくれるまで今の状態を保つんだ！

Fクラス男子E「塚本、このままじゃ埒があかない！」

塚本「もう少し待っている！今数学の船越先生も呼んでいる！」

しばらくの間、お互いに拮抗した状態が続いていると、僕達のと
って悪い知らせが聞こえた。

Dクラスが数学の船越先生を呼んだのは採点目的ではなく、立会
人になって貰う為だろう。

工藤「まずいぞ、水菜隊長！ただでさえ拮抗しあっている状態なの
に、これ以上戦線を拡大されたら！」

優「分かってる！けど、今の僕達には防戦以外の選択しかない！今
の戦力で勝ちにいったら、さらに戦力を失っただけだよ！」

横田「だったら、吉井隊長達が戦ってDクラスの連中を倒すという
のはどうです？！Bクラス並の成績を持つ吉井隊長達なら！！」

明久「それもダメだ！こっちが勝ってしまったらDクラスの本隊が動き出すかもしれない！雄二達の準備が出来ているかどうかすら分からない状態で勝ちにいくことはできない！！」

優「船越先生が来るとなると向こうは数学で攻めてくるはず……。だつたらこつちは、相手に先生を選ばせないようにするしかない！ 相手が仕掛ける前に船越先生以外の教師を呼んで化学か総合科目で戦うんだ！ 僕達は今まで通りに時間を稼ぐしかない！！」

ピンポンパンポーン《連絡致します》

僕達が言い争っていると須川君の声が校内放送から聞こえた。

どうやらうまく雄二の元に行き、Dクラスに見つかることなく放送室に行けたようだ！

須川《船越先生、船越先生》

しかも偽情報を流す相手は先程話題に上がっていた船越先生だ！
うまくいけば最悪の状況を回避することができる！

ナイスだよ！須川君！

須川 《吉井明久君が体育館裏で待っています》

え？須川君？

須川《生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです》

うええええええええええええええええええい！？

す、須川君！？！なんて恐ろしい相手にそんな偽情報を流しちゃうてるの！？

分かってるの！？相手はあの船越先生だよ？！

45歳で独身、婚期を逃し、生徒達に単位を盾に交際を迫るようになった先生だよ！？

た、確かにそんな情報なら確実に船越先生は体育館裏まで来てくれるし、明久が来るまで何時間でも待つかもしれないけど、いくら偽情報でも明久の人生を売るといふ行為だよ？！

いや、待てよ……。明久が須川君に偽情報を考える人を頼んだのは……。雄二だ！！

明久「雄二イイイイイイイ！！！貴様アアア！！！」

明久もその事に気づいたのか友人の酷い偽情報に怒りの咆哮を上げる。

工藤「吉井隊長……。アンタあ男だよ！」

横田「ああ。感動したよ。まさかクラスの為にそこまでやってくれるなんて！」

明久「ち、違うんだ！確かに僕の指示だけど、あれは偽情報で！！ちよつと！？なんで握手を求めて来るの？！僕の話聞いて！！」

なんてことだ……。僕達の前線のメンバーですら須川君の偽情報が明久による捨て身の覚悟によるものだと勘違いしてしまっている。感動のあまり明久に握手を求める者すら現れている……。

これじゃあ、いくら否定しても聞いてくれそうにない。

Dクラス男子G『おい、聞いたか今の放送』

Dクラス男子N『ああ。Fクラスの連中、本気で勝ちにきてるぞ』
Dクラス男子L『あんなに確固たる意志を持つてる奴らに勝てるのか……？』

須川君の放送によってDクラスの連中は動揺し始める。

先程まで劣勢だった僕達の戦場は良い影響が出てきた分、ますます先程の偽情報が否定できなくなってしまう。

須川『繰り返しお伝えします。船越先生、吉井明久君が体育館裏で待っています。生徒と教師n（ドガアアアアアアンンン！！）な、なんだ？！ドアが蹴破られただと？！』

？？？『須川君ッ！！なんなの今の放送は？！』

須川君は先程の内容をさらに繰り返し返そうとすると何かが破壊された凄まじい音が放送によって聞こえてきた。って、この声は……唯？！

須川『み、水菜さん！？君はさっきまで教室で待機していたはずじゃ！？』

唯『話を逸らすな！！アタシのことはどうでもいい！！先にこっちの質問に答えなさい！！返答次第では死をもって償わせる！！』

須川『？！！ま、待ってくれ！あれは坂本が……！！』

唯『……へえ……そう。まあ……とりあえず、アンタも同罪なんだからね……恨むなら坂本君を恨みなさい……（ジャラ！）』

気づいたときには既に縛られ、身動きは一切取れない。まさに神業だ。

さすがに、高校生になってからは明久にはそのような行為をしないようになってきたが、明久はいつまた唯に『お仕置き』されるか、日々警戒しているのだ。

Dクラス男子H『な、なんだったんだ……今の放送は？』

Dクラス男子K『お、おい！』百の捕縛術を持つ魔女』って、あの伝説の捕縛術使いのことか！？』

Dクラス男子Z『まさか……噂は本当だったのか？！しかも、そいつがなんだってFクラスにいるんだ！？』

Dクラス男子E『やべえよ！マジやべえよ！勝てる気がしないんですけど……！』

幸か不幸かさっきの放送でDクラスはさらに動揺を大きくし始める。

優『今だ……！敵はかなり動揺している！この機に乗じて押し返すんだ……！』

工藤『そ、そうだ！吉井隊長と須川の死を無駄にするな！』

横田『我々には『百の捕縛術を持つ魔女』がついているんだ！絶対に勝つぞーっ！』

逆にうちのクラスの士気は一気に高まり、良い影響を与えた！この勢いならばらくの間持ち堪えるはずだ……！

須川君の死（妹による『お仕置き』）を無駄にしないためにもが
んばるんだ！！

田中「工藤が戦死した！」

柴崎「西村の総合はもう残り40点だ！」

横田「森川が戻ってこない！やられたか！？」

しばらく混乱が続いていたDクラスだったが、塚本君の大声による指示により、徐々に落ち着きを取り戻し、こちらの士気が上がったまま戦うことしばし、戦力差が影響が現れ始め、次々と僕達に悪い報告が聞こえてきた。

工藤君と森川君が戦死したことにより、僕の指揮していた先攻部隊はこれで全滅。

明久の部隊を含め18人までいた人数はすでに僕等を含め6人になっってしまう。

もはやこれまでか！

雄二「明久、水菜！あと少し持ち堪えろ！」

諦めかけていると、そんな激が聞こえてきた。

後方を見渡すと、僕等の遙か先に雄二達の姿が見えた。

まさか、あの距離からはっきりと声が聞こえるなんて……。

明久「皆！援軍が来てくれたから、もう少し持ち堪えるんだ！」

塚本「させるな！！合流される前に吉井達を全滅させろ！面倒なことになるぞ！」

Dクラス前線部隊指揮官の塚本君はこちらの援軍に気づき、合流される前に一気に叩き潰すという手段に出た。

明久「マズイよ、優！いくら雄二達が来てくれているとはいえ、こちとの距離はまだ大きい！！このままじゃ他の皆が全滅する！」

優「だったら僕達の出番だ！皆！よく持ち堪えてくれた！！あとは僕達に任せて一旦、下がるんだ！！」

田中「了解！って、うわあ？！西村が戦死してしまいました！」

くっ！指示が遅すぎた！これで僕達を除けば残り3人だ。

鈴木「五十嵐先生、Dクラス鈴木が田中あk」

明久「させるか！田中君に代わり、Fクラス中堅部隊隊長、吉井明久が受ける！」

田中君が捕まる間一髪に明久が試獣召喚を受ける。

『Fクラス	吉井明久	V S	Dクラス	鈴木一郎』
化学	254点	V S		67点

明久の召喚獣の木刀が鈴木君の召喚獣を撃破。
だが、それだけでは敵の進軍は止まらない。

笹島「くそっ！吉井と水菜を相手にするな！他の3人を先に潰せ！
先生、Dクラスの笹島圭吾が柴s」

優「悪いけどさせない！Fクラス先攻部隊隊長、水菜優が受けるよ！」

逃げ遅れた柴崎君の代わりに僕が笹島君の相手になる。

『Fクラス	水菜優	VS	Dクラス	笹島圭吾』
化学	314点	VS		99点

笹島君の召喚獣にエネルギー弾15発分の威力を持つ大きなエネルギー弾をぶつけて戦死させる。

須藤「ダメです！こちらが他の奴を相手にする前に向こうの隊長の試獣召喚が早すぎます！」

塚本「だったら、こちらがあのだの2人に試獣召喚するんだ！そうしてしまえば助けには行けない！その間、他の奴を潰せ！」

須藤「了解！Dクラスの須藤亮が吉井明久に申込む！試獣召喚！（サモン！）」

香河「同じくDクラスの香河良一が水菜優に申込みます！試獣召喚！（サモン！）」

明久「くっ！そう来るか！試獣召喚！（サモン！）」

優「仕方ない！水菜優、召喚に応じます！試獣召喚！（サモン！）」

塚本君は『試験召喚戦争』のルールを利用して僕達を足止めするつもりだ。

『試験召喚戦争』のルールの中に『相手が召喚獣を呼び出したのに関わらず召喚を行わなかった場合は戦闘放棄とみなし、戦死者同様に補習室にて戦争終了まで補習を受ける』というのがある。

敵ながらうまい戦法だ。向こうが先に試獣召喚をしている以上、僕達はそれに応じなければならぬ。即効で倒したとしても同じように試獣召喚されればこちらは応じるしかない。これじゃあFクラスのスの3人を助けに行くことができない！どうする！？

須藤「吉井、覚悟！！」

明久「くっ！……こうなったら、イチかバチかだ！」

なにか思いついたのか明久は真正面から突撃してくる須藤君の召喚獣の真横に召喚獣移動させ、足払いを仕掛けた。

須藤「なっ！？」

豪快に床に転んでしまう須藤君の召喚獣。

明久の予想外の行動に驚いてしまっている須藤君の後方。

正確にはDクラスの後方を指差し、次の言葉を叫んだのだ。

明久「ああっ！霧島さんのスカートが捲れているっ！」

全員（優を除く）『なにいつ！？』

明久の言葉にその場にいるFクラスとDクラス男子はおるか女子までも後方を振り向いた。

凄い。流石は才色兼備と謳われるAクラス代表、霧島翔子さん。その霧島さんの下着目当てに戦っている最中にも関わらず、敵味方が隙だらけになる。

こんな古典的な罠に引っかけってしまうとは……。

だが、そんなのお構いなしに明久はさらに行動を移す。

自らの上靴を脱ぎ、近くの窓に向かって思いっきり投げつける。

ガシャアアン！

破砕音とともに、窓が砕け散った。

全員（優を除く）『な、なんだ！？なにことだ！？』

明久（優！今のうちにアレを使うんだ！）

明久が僕にアイコンタクトを送ってきた。

明久の目線の先を追うと壁に備え付けられている消火器が目に入った。

なるほど。混乱に乗じてさらに視界を遮って、動きを封じるんだね！

だけど、そんなことをすればこちらに疑いがかかり、後々面倒になってしまう。

ここはひとつ……芝居をするか。

優（明久！今から芝居をするよ！不特定の人物を仕立て上げるんだ！上手く合わせて！）

明久（了解！）

優「ちょ、ちよつと君！消火器なんて持って一体何をするつもりなの！？」

僕は明久に芝居を一緒にするようにアイコンタクトを送った後、素早く消火器を手に取り、安全ピンを抜き、噴射口をDクラスのいる廊下に向け、相手を名指しせず架空の人物を作り上げたあと、消火器のレバーを押す。

ブシャアアアツ！！

という音と共にピンク色の粉末がDクラスのいる廊下を包み込んだ。

須藤「う、うわっ！今度はなんだ！？」

中野「ぺっぺっ！こりゃ消火器の粉じゃねえか！」

香河「前が見えない！誰！！こんなことしたの！？」

これで戦闘の断続はかなり困難になったはず。

明久「な、なんてことをするんだ！！君！って、何処に逃げるんだ！待つんだ！くそ！消火器の粉に紛れてるから追跡できない！優！アイツは一体？！」

優「少なくとも『試験召喚戦争』の参加者じゃないと思う！！顔は見えなかったから何処のクラスの奴なのかも分からなかった！オマ

ケに消火器を持っていかれたから、証拠もない！！」

これでこの場にいる誰にも疑いは向けられないだろう。

案の定、Dクラスの連中は僕達の会話を信じた。

須藤「くそっ！吉井達の話じゃ、犯人の顔は見えていないらしい。オマケにどのクラスに所属する奴なのかも分からなかったら捜しようがないじゃないか！」

中野「だとしても、こんな事して得する奴なんていないはずだ！悪戯目的でやるとするなら、CクラスからEクラスの連中かもしれん！」

香河「だけど、証拠は犯人に持っていかれたらしいよ？！今頃、処分されているはずだ！仮に犯人が分かったとしても肝心の証拠がなきゃ白を切られるだけだ！」

Dクラスの連中は怒りで頭に血が上っており、『消火器の粉を撒き散らし、『試験召喚戦争』の邪魔をした不届き者』の事で頭がいっぱいだ。『試験召喚戦争』の続きを行うことを忘れてしまっている。

これで戦闘の断続をするのはより困難になった。

明久と一緒に振り返ると、雄二達が駆け寄ってくる姿がかなり近くに見えた。

これなら合流できる。あとは消火器の粉を無くして、視界を元に戻すだけだ。

僕の考えを読んだのか、野球で投手の経験のある明久は使い終わった消火器を天井に設置されているスプリンクラーにめがけて思い切りブン投げた。

それは見事に命中する。

シュワァ

狙い通りスプリンクラーが作動する。

僕は水滴が辺りに舞う粉を完全に落とす前に消火器を回収し、近くにあった消火栓の中に隠した。

ここで消火器が見つかってしまったら今までの会話が芝居だとバレてしまい、計画が水の泡になってしまうからね。

突然、視界がクリーンになったことにDクラスはその異変に気づくがもう遅い。

近藤「待たせたな、吉井！水菜！五十嵐先生！Fクラス、近藤吉宗が行きます」

既に合流した雄二率いるFクラス本隊の一人、近藤君が今だ混乱しているDクラスの生徒の1人に試獣召喚を行う。

『Fクラス	近藤吉宗	VS	Dクラス	中野健太』
化学	91点	VS		43点

塚本「くっ！ここは退くぞ！全員遅れるな！」

敵部隊隊長の塚本君の撤退命令がすぐ近くから聞こえた。

雄二「深追いはするな。俺達も明久の部隊を回収したら一旦戻るぞ」

Fクラスの代表である雄二の指示だ。

おそらく深追いをすればDクラスの本隊が出てくるかもしれない。

それを避けるために消極的な命令を出したのだろう。

雄二「さて、無事なようだな。明久、優」

明久「うん、まあね」

優「なんとかね。でも……僕の部隊は回復試験を受けに行った人以外全滅だけど……」

雄二「いや、俺達が来るまで前線を保った時点で上出来だと俺は思う」

優「……そう言ってくれるとありがたいよ」

とにかくこれでひとまず窮地を逃れることはできた。
僕達は部隊を立て直すべく、荒れに荒れた戦場を後にしたのだ。

第七章：開戦！ Fクラス VS Dクラス 〔中編〕（後書き）

蒼き演奏者「本当は後編にする予定でしたが、アレンジしている内に内容が長くなってしまったため、中編にしました。次回！ようやくDクラス戦に決着がつかます！！小説の内容、もしくはバカテスに関しての感想をお待ちしています！！」

第八章：開戦！ Fクラス VS Dクラス 〱後編〱

問 以下の問いに答えなさい。

『女性は何（ ）を迎えることで第二次性徴期になり、特有の体つきになり始める』

姫路瑞希の答え

『初潮』

教師のコメント

正解です。

水菜唯の答え

『初塩』

教師のコメント

違います。正しくは『初潮』です。

島田美波の答え

『恥ずかしいのでウチには答えられません!!』

教師のコメント

気持ちは分かりますが、これはテストですので。

吉井明久の答え

『あの日』

水菜優の答え

『重い日』

教師のコメント

分かっているのですしたら、ちゃんと答えてください。

土屋康太の答え

『初潮と呼ばれる、生まれて初めての生理。医学用語では、生理のことを月経、初潮のことを初経という。初潮年齢は体重と密接な関係があり、体重が43Kgに達するころに初潮をみるものが多い為、その訪れる年齢には個人差がある。日本では平均12歳。また、体重の他にも初潮年齢は人種、気候、社会的環境、栄養状態などに影響される』

教師のコメント

詳し過ぎです。

Fクラスの教室は……まさに地獄絵図と化していた……。

唯「諸君！ここは何処！！」

Fクラス男子全員『『『『『『『『我らが代表坂本雄二の裁判を執り行う場所であります！！』』』』』』』

唯「諸君！被告人の罪状は！！」

Fクラス男子全員『『『『『吉井明久の人生を！船越女史に売却した罪であります！！』』』』』』

唯「よろしい！！これより、坂本雄二の裁判を執り行う！！」

Fクラス男子全員『『『『『Yes！Our Princes
！！』』』』』』

僕の妹、唯の命令に忠実に従う我等がFクラスのメンバー達。

彼等は何処かの宗教団体が黒魔術でも行うような黒覆面と黒マントを着用している集団、通称『FFF団』という異端審問会だ。明久の話だと、彼等は抜け駆けや女子から好意や興味を持たれている者が判明すると何処からともなく現れて、異端者を粛正する団体だそうだ。

彼等が囲んでいるその中心には、十字架によって縛られている被告人こと、雄二の姿が見える。

あの後、Dクラス先行部隊との戦闘を終えた僕達は雄二率いる本隊と共に、教室に戻ってきたのだが、僕達を迎えたのは満面の笑みを浮かべ、目は一切笑っていない唯だった。その彼女のそばには白目を剥いて亀甲縛りされている須川君の姿もあった。

雄二はその姿を見た瞬間、一目散に逃げようとしたが、唯の捕縛術によってアッサリと捕まり今に至る……。何故、FFF団が唯に従っているのかというと……。美少女のご命令だからだそうだ。

因みに僕は妹の手によって放心状態の須川君を亀甲縛りから開放している最中だ。

明久は重要参考人（被害者）として、唯（特別裁判長）の傍にいます。

唯「さて……被告人こと、坂本雄二君……？まずは理由を聞こうか

しら？」

雄二「た、確かにあの放送の内容を考えたのは俺だ！だが、そもそも偽情報を流すのを考えたのは明久だ！それに！俺に内容を考えるように指示したのも明久だ！俺はただ、明久の作戦に従っただけだ！！」

唯「ご託はいいわ。アタシが知りたいのは……何故、吉井を選んだのかよ？いくら偽情報とはいえ、船越先生の相手にするのは、なにも吉井じゃなくてもいいはずよ？放送室に向かった須川君でもいいはずよね？そこところはどつなかしら？」

雄二「そ、それは！明久が適任だも！適任？船越女史は男なら見境なく交際を迫っているって聞いたけど？それなら誰でもいいってことよね？」ぐうつ！」

雄二の必死の言い訳を言い切る前に即座にそれを否定する。

感情がまるで籠っていない淡々とした口調をする妹の目からはハイライトが消えている。

正直にいうとその表情は怖い……。

僕の妹が、こんなに怖いわけがない！っと、否定したくなるほど怖いのだ。

明久「ゆ、唯……もうそのくらいにしてあげようよ！」

唯「吉井？どうしてこんな奴を庇おうとするの？あなたの人生の危機をつくった、ほかでもないこいつを？」

明久「そ、それは、雄二は僕の友達なんだから……！」

は去った。

いつもの唯に戻った唯は雄二を開放するようにFFF団に指示をする。

程なく雄二は十字架から開放され、明久の方に歩み寄る。

雄二「あ、明久……すまん！！本当に悪かった！」

明久「ちよっ！雄二？！」

明久の目の前で雄二は土下座をしたのだ。

雄二「あの偽情報はお前を困らせてみようといふ出来心で考えたものだ！それなのに、お前はこんなことをした俺を親友といってくれた！本当に……本当にすまない！！」

明久「雄二……。いや、本当のことを言うと僕も雄二を許せなかった。でも、唯に処刑されそうになった雄二を見たら可哀想に思えて……。僕も、ゴメン」

雄二「明久……！」

雄二「雄二……！」

雄二と明久はその場でお互いの手を握り合う。

雄二と明久はお互いの胸の内を打ち明けたことにより、彼等の友情がより固く結ばれたと僕は思った。

雄二もこれに懲りて、明久をからかうのはやめてくれればいいのだけど……。

雄二「明久、雄二。そろそろDクラスとの戦いに決着をつけに行く

べきじゃないかな？」

秀吉「そうじゃな。ちらほらと下校しておる生徒の姿も見え始めたし、頃合じやろう」

康太「……………（コクコク）」

雄二「おっしや！Dクラス代表の首級を獲りに行くぞ！」

Fクラス全員『『『『『『『『『『『『『『『『『『『』』』』』』』』』』』』

雄二の号令に従い、一気に教室から出ていく僕達は、下校を始め他のクラスを上手く交わしながら、Dクラスの教室へと向かう。その途中でDクラスの先攻部隊が僕達の進行を阻止しようとする。

雄二「下校している連中にうまく溶け込め！取り囲んで多対一の状況を作るんだ！」

Fクラス男子B「そっちから回り込め！俺はコイツに数学勝負を申し込む！」

Fクラス男子G「なら、俺は古典勝負を」

Fクラス男子D「日本史で」

雄二の指示を聞いたFクラスの皆は下校中の生徒に紛れ、Dクラスの生徒を次々と取り囲んでいく。

少々卑怯な戦法かもしれないけど、Fクラス個人で戦うのは極力避けなければならない。

雄二「Fクラスは全員一度撤退しろ！人ごみに紛れて攪乱するんだ！」

雄二の号令でFクラスは撤退を始める。

僕も人ごみに紛れて、うまく戦闘を避けていく。

平賀「逃がすな！個人同士の戦いになれば負けない！追い詰めて討ち取るんだ！」

個々の実力の勝るDクラスだから取れる作戦だ。本隊の人達も平賀君に従い、次々と分散して追討にかかっていく。

その分、平賀君の守りが薄くなるが、平賀君はDクラスの代表。Fクラスに囲まれてもしない限りは討ち取れないだろう。

だが、僕にとっては好機だ。平賀君の姿は間近に映るし、近衛部隊がいらないほど防備が薄くなっている。

さらに平賀君の近くには現国の竹内先生と古典の向井先生がいる。

唯「チャンスよ、吉井！今なら私達だけでも討ち取れるわ！行くわよ！」

明久「了解！」

いつの間にか明久と唯は互いに行動し合っていたみたいだ。

唯もこの状況を好機と見て、明久を連れて平賀君の下へ駆け出していく。

僕も唯達に遅れを取らぬよう別方向から平賀君に迫っていく。

唯「向井先生！Fクラスの水菜唯と吉井明久が」

玉野「Dクラス玉野美紀、試獣召喚（サモン！）」

明久「なっ！近衛部隊！」

あと少しで平賀君にたどり着けるとところで明久達が近衛部隊の1人に捕まってしまふ。

だったら、ここは僕が！

優「竹内先生！Fクラスの水菜優が」

泉川「させませんわ！泉川亜希奈、試獣召喚（サモン！）」

優「な！こっちにもいたの！？」

僕も唯達と同様に僕もDクラスの近衛部隊に捕まってしまふ。

平賀「やはり来ると思ったよ、水菜君。まさかと思ったけど、妹さんまでFクラスにいるとは。警戒しておいてよかったよ。しかも吉井君もいたのは予想外だったよ」

明久「くっ！あと一歩で僕達の手で討ち取れると思ったのに！」

平賀「確かに……君達と戦えば俺が負けるのは確実だ。ここは引かせてもらふよ」

唯「ちょっと！逃げるつもり！？敵前逃亡よ！」

平賀「戦略的撤退といってもらいたいよ。それに君達は俺に『試獣召喚』を申し込めなかったのだから、逃げてもルール違反にはならない」

その通りだ。僕達は平賀君に戦いを申し込む前に近衛部隊に捕ま
ってしまったのだから、平賀君が逃亡してもルール違反にはならな
いのだ。

明久「確かに平賀君が逃亡しても僕達はそれを阻止することはでき
ない。だから」

明久はもったいぶるように一息入れる。

明久「姫路さん、よろしくね」

平賀「は？」

姫路「あ、あの……」

明久の言葉に『なにをいってるんだ？』という顔になった平賀君
の後ろから、申し訳無さそうに姫路さんが肩を叩いた。

平賀「え？あ、姫路さん。どうしたの？Aクラスはこの廊下は通ら
なかったと思うけど」

突然の姫路さんの登場に動揺してしまう平賀君。

当然だ。まさか僕達だけではなく、姫路さんまでFクラスに所属
しているなんて想定外だろう。

姫路「いえ、そうじゃなくて……」

もじもじと言いつらそうに体を小さくする姫路さん。その仕草は
まさしく女の子だ。

正直に可愛いと思うし、明久が惚れてしまう理由が分かる。

姫路「Fクラスの姫路瑞希です。えっと、よろしくお願いします」

平賀「あ、こちらこそ」

姫路「その……Dクラス平賀君に現代国語勝負を申し込みます」

平賀「……はあ。どうも」

姫路「あの、えっと……さ、サモン試獣召喚です」

『Fクラス	姫路瑞希	VS	Dクラス	平賀源二』
現代国語	339点		VS	129点

124

平賀「え？あ、あれ？」

戸惑いながらも平賀君も召喚獣を構えさせるが、あの点数では勝ち目なんてないだろう。

姫路さんの召喚獣はその背丈の倍はある大剣を軽々と構えている。見た目と反し、かなり強そうだ。

姫路「ご、ごめんなさいっ」

姫路さんは平賀君に謝りながらも、その得物に似合わず素早い動きで平賀君の召喚獣を頭から一刀両断する。

反撃すら許さず、一撃でDクラス代表を沈め、僕達の勝利で『試験召喚戦争』は幕を下ろしたのだ。

第九章：それが彼と彼女の初めての出会い

問 以下の問いに答えなさい。

『人が生きていく上で必要となる五大栄養素を全て書きなさい』

姫路瑞希の答え

『？脂質 ？炭水化物 ？タンパク質 ？ビタミン ？ミネラル』

教師のコメント

流石は姫路さん。優秀ですね。

吉井明久の答え

『去年までの僕の食生活 具体例：？砂糖 ？塩 ？水道水 ？サ
ラダ油 ？醤油』

教師のコメント

この答案を見て、先生は去年までの君の家庭にどのような複雑な事情があったのか、深く疑問に思いました。

それとそれで生きていけるのは君だけだと思います。

水菜優と水菜唯の答え

『『去年までの明久（吉井）の食生活』』

教師のコメント

君達の中で去年までの吉井君の食生活は五大栄養素扱いなのですか。

土屋康太の答え

『? エロ ? フェロモン ? 色気 ? フラグ要素 ? イベント』

教師のコメント

そんな五大栄養素は存在しませんし、仮にあったとしてもそれで生きていけるのは君だけです。

Dクラス代表 平賀原二 討死

その報せは瞬く間に戦場に轟く。

Fクラス&Dクラス全員 『『『『『『『うおおーっ!』』』』』』

』

その報せを聞いたFクラスの勝鬨とDクラスの悲鳴が混じり、耳をつんざくような音響が校舎に響きわたる。

Fクラス男子B「凄えよ! 本当にDクラスに勝てるなんて!」

Fクラス男子C「これで畳や卓袱台ともおさらばだな!」

Fクラス男子D「ああ。アレはDクラスの連中の物になるからな!」

Fクラス男子A「坂本雄二サマサマだな!」

Fクラス男子H「坂本万歳！」

Fクラス男子L「姫路さん愛しています！」

Fクラス男子E「唯さん結婚してくれ！」

代表である雄二を褒め称える声（一部を除いた）がいたるところから聞こえてくる。

先程まで雄二のいた場所では、がつくりとうなだれているDクラス生徒達とその奥でFクラスに囲まれている姿が見えた。

雄二「あー、まあ。なんだ。そう手放しで褒められると、なんつか」

褒められていることに慣れていないのか頬をポリポリと掻きながら照れくさそうにして明後日の方向に顔を向ける雄二。

Fクラス男子D「坂本！握手してくれ！」

Fクラス男子B「俺も！」

Fクラスに囲まれた雄二に握手を求めてくる者すら現れた。

すっかり英雄扱いだ。この光景を見ただけでどれだけ皆があ教室に不満を抱いていたかが分かる。

まあ……卓袱台の脚どころか畳すら一部が腐っていたのだからね……。

平賀「……まさか水菜兄妹や吉井君だけでなく……姫路さんもFクラスだなんて……信じられん」

後ろから声が聞こえ振り向くとそこにはヨタヨタと歩み寄る平賀君の姿があった。

相当落ち込んでいるようだ……。

姫路「あ、その、さっきはすみません……」

違う方向から姫路さんが駆け寄り、平賀君に謝った。

平賀「いや、謝ることはない。全てはFクラスを甘く見ていた俺達が悪いんだ。ルールに則ってクラスを明け渡そう。ただ、今日はこんな時間だから、作業は明日で良いか？」

雄二「いや、その必要はない。俺達はDクラスを奪う気はない」

だが、雄二は平賀君の設備の交換を断る。

須川「お、おい。坂本、それは一体全体どういうことだ!？」

雄二の話にいつの間にか復活していた須川君やFクラスの生徒達から不満の声が上がる。

まあ、当然の反応といったところだが、僕達の最終目標はAクラスの設定なんだから。

明久「皆落ち着いて! 忘れたの? 僕達の目標はあくまでもAクラスのはずでしょ?」

須川「そ、それはそうだが……じゃあ、一体なんのためにDクラスを倒したんだ?」

雄二「それは当然、次の相手……Bクラスを倒す作戦に必要な布石

を作るためだ」

今度はDクラスより2つ上の成績を持つBクラスを倒すと言うのだから、Fクラスはさらに騒ぎ出す。

雄二がそういうのだから、Bクラスを倒すのはAクラスを倒すための布石を作るためなんだろう。

雄二「Dクラスには設備を交換しない代わりに条件がある」

平賀「それは俺達にはありがたいが……。その条件というのは？」

雄二「なに。そんなに大したことじゃない。俺が指示を出したら、窓の外にあるアレを動かなくしてもらいたい。それだけだ」

雄二が指さすアレとはDクラスの窓際に設置されているエアコンの室外機だ。

ただし、あれはDクラスに設備されている物ではない。

スペースの関係上でここに間を借りているBクラスの物だ。

平賀「Bクラスの室外機を？」

雄二「ああ。設備を壊すんだから、当然教師にある程度睨まれる可能性もあると思うが、悪い取引じゃないはずだ」

雄二の言う通り、悪い話であるはずがない。

確かにBクラスの設備を壊せば教師に睨まれる可能性はあるが、嚴重注意だけで済むはずだ。

Dクラスにとって、たったそれだけのことをするだけで3ヶ月の期間をあのカビ臭い最低な教室で過ごすという状態から逃れられるのだから、願ってもない提案のはずだ。

平賀「それはこちらとしても願ってもない提案だが、そんなことでBクラスに勝てるというのか？」

雄二「ああ。どうしてもBクラスに勝つには必要なんでな」

平賀「……そうか。ではこちらはあるがたくその提案を吞ませて貰おう」

雄二「タイミングについては後日詳しく話す。今日はもう行っていぞ」

平賀「ああ。ありがとう。お前らがAクラスに勝てるよう願っているよ」

雄二「ははっ。無理するなよ。勝てっこないと思っているだろ？」

平賀「それはそつだ。AクラスにFクラスが勝てるわけがない。ま、社交辞令だな」

じゃあ、と手を挙げ平賀君はその場を去っていった。

雄二「さて、皆！今日はご苦労だった！明日は消費した点数の補給を行うから、今日のところは帰ってゆつくりと休んでくれ！解散！」

雄二の号令で、皆雑談を交えながら帰りの支度をするために自分のクラスへと向かい始めた。

明久「雄二、優、唯。僕達も帰ろっか」

雄二「そうだな」

優「そうだね」

唯「あ！ゴメン。アタシ先に帰ってもいいかな？」

優「え？」

明久は僕達と一緒に帰るために話しかけてきた。

雄二と僕は賛同したが、唯は先に帰ると言ってきた。

明久「別に構わないけど……今日、なにか急ぎの用事でもあるの？」

唯「あ、うん！まあ、そんなところ！じゃあね！坂本君、吉井、優兄！」

雄二「お、おう！また明日な！」

明久「唯！帰り道には気をつけるんだよ！！」

唯にしては歯切りの悪い話し方で、無理やり話を切り上げて教室へと走っていった。

雄二や明久の返事にも、振り向かず走りながら手を振っていた。
……本当にどうしたんだろう？

雄二「珍しいな。アイツが俺達と一緒に帰らないなんてな」

明久「うん。優はなにか知らないの？」

優「いや……流石に兄とはいえ、妹の用事を全部把握してるわけじ

やないから……」

だけど、唯の慌てようは本当に急ぎの用事があるのだろう。

雄二「まあ。ここで話していてもしょうがないから、歩きながら話すか」

明久「そうだね。いや……本当に今日は疲れたね」

姫路「あ、あのっ、坂本君っ」

雄二「ん？」

唯の後を追って教室に向かおうとすると雄二を呼び止める声がした。この声は姫路さん？

雄二「お、姫路。どうしたんだ？」

姫路「実は、坂本君に聞きたいことがあるんです」

胸を手に当てながら興奮気味に雄二に話しかける。

なにか大事な話でもあるのだろうか？

だとしたら、僕達は席を外したほうがいいのかも说不定い。

優「明久、大事な話みたいだから先に帰ろうか」

明久「へ……？あ、ああ！そうだね！雄二、誘っておいて悪いけど先に帰っててもいいかな？」

雄二「ああ。悪いな、明久、優。それで姫路、話というのは？」

姫路「あ、はい。ここでは話にくいのでこっちで……」

そういつて姫路さんと雄二は僕達とは少し離れたところで話を始めた。

内容は微かにしか聞こえないが、ここにいたら盗み聞きしているような気がしてきたので、明久を連れて教室に戻っていった。

明久「それにしてもさ」

優「ん？」

明久「雄二はどうしてBクラスの室外機なんか狙ったんだろう？……
… Bクラスに勝つために必要だって、言ってたけど……」

それは僕も疑問に思っていたことだ。

平賀君も雄二にそのことを聞いていた。僕もそれを考えていたが答えはさっぱりだ。

だけど、あの雄二が何の意味も無くわざわざDクラスの交渉に出すはずがない。

おそらく僕では到底思いつかない、とっておきの秘策があるのだろつ。

優「まあ、何にせよ……あの雄二のことだしね。無意味なことをするはずない。明日になれば雄二から話してくれるんじゃないかな？」

明久「そりゃあ……そうだけど」

なにか腑に落ちない態度で返答する明久。
もしかして。

優「姫路さんと雄二のことが気になるの？」

明久「ど、どうしてそのことを!？」

優「あのねえ……。何年、明久の幼馴染兼親友をやっていると思っているの?それに明久ってば、昔から顔に出やすいしね」

明久「そうなの!?!さすが僕の親友……!実はそうなんだ」

やっぱり……。

あの後、どうも明久の態度がぎこちなかったから変だと思ったけど。

優「まあ、雄二はああ見えて紳士なんだし、姫路さんに失礼なことはしないんじゃない？」

明久「そうなんだけど。……何か……胸の中がモヤモヤしてさ……。どうにも落ち着かないというか」

なるほどね……。今のところ明久は自分の恋心にまったくの無自覚なんだ。

友人としては明久の恋には応援してやりたいところだが……妹や島田さんのこともある。

まだまだ様子を見ていくしかない。

優「うーん……だったら、久々に一緒に勉強でもしない？そうすれば、その内モヤモヤした気持ちも晴れるかもしれないよ？」

明久「勉強か……。そういえば、ここ最近、優と唯と一緒に勉強なんてしなくなつたよね？」

優「そうだね……。まあ、これも明久が自分で進んで勉強をするようになった証拠じゃないかな？昔……っというより去年だけど、明久ってば本当に勉強嫌いだったからね」

明久「うつ！優……。昔の傷口を平然と掘り返さないでよね……」

明久は傷ついたような顔をし、ふとその足取りを止めてしまう。

明久の顔は「しまった！」っという顔をしている。

優「どうしたの？明久？」

明久「ゴメン、優！肝心の教科書を卓袱台の下に置いてきちゃった！！待たせるのは悪いし、先に帰ってて！」

明久は僕が返答する前に回れ右をし、学校の方へと走っていく。

僕は呆然としてトップスピードで走る明久の後ろ姿を見送るしかなかった。

家までまだ少し遠いがここまで歩いてきたんだし、明久の言う通り先に帰ることにした。

優「……………あれ？よくよく考えてみれば、僕が1人で学校から家に帰るなんて……………これが初めてじゃないかな？」

明久と別れた後、会話する相手もないのでただ無言で家までの道のりを歩いていて僕は急にそのことに気づいたのだ。

小学生から中学生の頃は唯か明久のどちらかと一緒に帰っていたし、高校生になってからは雄二や秀吉、康太とかと一緒に帰ることが当たり前だったのに……………。

今僕は1人で自分の家に帰ろうとしている。それだけのことなのに妙な不安感を覚える。

優「『ごく自然で当たり前のことだけど、失わなければそれが大切なことだと気づけない』……………か」

僕は思わず亡くなった父が、昔からボヤいていた言葉を口にした。幼少の頃の僕は、その言葉の意味がまるで理解できなかったが、今ならその意味が少し分かる気がする。

よく考えたら、今まで1人で帰るような出来事がなかったほうが不思議だ。

でも

優「……………なにか飲もうかな」

退屈だった。1人でいることが。何かしていないと妙に落ち着かない。

別に喉が乾いている訳じゃないがなにかそうしないといけない気がした。

確かこの近くに自販機が置いてあったはずだ。

そこへと向かっている途中で。

不良1『へへへ。よう！その彼女！今暇かな？』

不良2『俺達と一緒に遊ばないか？』

???『ちょ、ちよつと！なに！？触らないでよ！』

不良に絡まれている女の子を見かけたのだ。

あれ？絡まれている女の子……もしかして……秀吉？

そこには見慣れているはずの秀吉の姿があつたが、変だ。

なにが変だつて？それは彼の服装だ。

何故か秀吉は文月学園の女性用の制服を着ていた。

彼は男だから女性用の服を着るのを相当嫌がつていたはずだ。

だけど、現に僕の目に映っているのは女性用の制服を着用している秀吉だ。

もしかして……演劇部からの帰りなのだろうか？

今来ている服装はその時に使用していた服で、そのままの服装で帰っている途中、女性と見間違われて、不良に絡まれている？

て、何冷静に分析なんかしているんだ自分？！

早く助けに行くべきだろう！

だが、暴力を振るうわけにはいかない。腕っ節のない自分には不良を倒すことなんて到底できない。

……だったら。

優「ああー！ようやく見つけたよー！！」

秀吉（？）「え……？」

不良1「あん？！なんだデメエ！！」

不良の1人が僕に話しかけるが堂々とそれを無視する。

優「『校門の前で待つて』って、言ったのに……いくらなんでも彼氏を置いて先に帰るなんてヒドイよ!」

秀吉(?)「え?あ、あの……?」

突然の僕の登場でしかも彼氏だなんて言われて驚いているのだからか?

いつもの秀吉なら僕の考えを察して、うまく恋人役を演じてくれるはずだけど……仕方がない。

僕は無理やり秀吉の右手を取り、不良達から引き離す。

優「すみません。彼女がどうもお騒がせしたようで。じゃあ!僕達はこれで!」

秀吉(?)「ふえ!?か、彼女!?//」

そう言っ僕は秀吉の右腕を組んで如何にも仲良しカップルだと見せつけ、そこから立ち去ろうとする。

不良2「待てや!そこのガキ!」

だが、不良の1人が立ち去ろうとする僕達を止めようとする。

まあ……そうだね。

そう簡単に見逃してはくれないよね……。

優「なんですか?僕達、早く帰りたいんですが?」

不良1「なにいきなり現れて俺達が先に目をつけた女を連れ去ろうとするんじゃない？」

優「連れ去る？人聞きの悪い。僕は彼女の彼氏なんだから心配になって迎えに来ただけですよ？ね？」

秀吉（？）「え……？いや、その……。そ、そうよ！！アタシの彼氏になんて口を訊くの？！」

ようやく僕の考えを察してくれたのか、秀吉も不良達に僕が自分の彼氏だと主張する。

不良2「はあ？そんな、なよなよした奴がこんな美少女の彼氏だなんて……勿体なさすぎるぞ？」

不良1「そうだよな……だったら、俺達がその彼氏の代わりになつてやるよ！！！」

そういつてようやく本性を表したのか、不良達はそれぞれ懷から獲物を取り出した。

1人は何処にでも売ってそんな果物ナイフ。もう1人は不良なら定番と言えるメリケンサックだ。

グリップの握り方や腕の構え方からして、おそらく素人だ。

とはいえ、こっちは秀吉を連れている状態で戦うなんて無理だ。

こっちは喧嘩の経験なんてないのだから、バカ正直に挑めるはずがない。

だったら、逃げるといふ方法しかないが……普通に走って逃げても向こうは追ってくるはずだ。

僕は制服の上着のポケットに手を入れ、ある物を掴む。

不良1「なんだ！？やるってんのか？！」

不良2「ええ根性してんのお！！！」

どうやら不良達は僕も獲物を取り出すためにポケットに手をつ込んだのだと思っ
ているようだ。

若干ながら、警戒を露わにしてくれている。……残念ながらナイフとかじゃない。

僕は一気にそれをポケットから3つ取り出し、不良達の足元に叩きつけた。

それらは一気に破裂し、赤い色の煙を不良達を包み込む。

地面に投げつけたそれは、唐辛子成分を配合した特製の煙玉だ。

さらに鞆にしまっておいた大量のまきびしを不良達の道のりに撒き散らす。

不良1「うわ！？なんじゃこりゃあ！？目に染みる！！！」

不良2「ぐああ！！目が痛い！！喉が焼けるように痛い！！このクソガキ！何処だ（プス！）イタアアア！？刺さった！なんか足に刺さったあああ！？」

優（よし！今の内に全力で逃げるよ！）

秀吉（？）（え……きゃあ！？）

さすがに秀吉の腕を引っ張って走るのは秀吉の腕を痛めると思い、僕は秀吉をお姫様抱っこして、全力でその場を後にする。

力で関節を曲げられない方向に曲げられてしまう。

な、なんで？！

秀吉（？）「アタシは『木下秀吉』じゃない！！アタシは『木下優子』よ！！！！なんでアイツと間違えられるのよ！？女子の制服を着ているのに！！！！」

優「うえええ？！秀吉のお姉さん！？そうとは知らず、すみません！！あまりに似ていたからつい間違えたんです！！本当にごめんなさい！！悪気は無かったです！！だからこれ以上関節を曲げないでえええええええ！！！！！！」

優子「……あ！ごめんなさい！！」

僕は必死に秀吉のお姉さん、木下さんに弁明をしようとようやく解放される。

そ、それにしても秀吉のお姉さんの方だったのか。秀吉には双子のお姉さんがいるとは聞いてはいたがあまりにも似ていたから間違えてしまった。

そりゃあ、木下さんが怒り狂うのは当然のことだ。

優子「本当にごめんなさい！！不良から助け出してくれた恩人なのに、アタシつたらなんてことを……」

優「……いや、こちらの方こそ。秀吉には双子のお姉さんがいると聞いていたけど、あまりにも似ていたから秀吉だと勘違いしてしまつて。女の子なのに男の人と間違えるなんて本当に失礼だよね……。ごめんなさい！！」

僕は木下さんに謝りながら深く頭を下げる。良く冷静に考えれば

どうして僕は秀吉が女性用の制服を着ていることを前提で考えたんだ……。秀吉には双子のお姉さんがいると分かっていたのに……。そもそも、秀吉が女性用の制服を着たまま下校するなんて考えられないのに。

優子「そのことはもういいわよ。本当に悪気があったわけじゃないみたいだし……。それより、あなた秀吉の知り合いなの？」

優「あ……すみません。僕は水菜優といいます。秀吉の友達で同じFクラスです」

優子「水菜……優。え……？あなたが！？」

優「あれ？僕のことを知っているんですか？」

優子「知ってるも何も……あなたのことは学園では結構有名なよ。生徒の鑑だといえる生徒の1人で、Bクラス並の成績を持っているって聞いているけど……。なんでFクラスに？」

優「ええっと、ちょっとした事情があってFクラスになったんです」

本当は明久と同じクラスになるためにワザとFクラスになったのだけど、こういうことは軽々しく言うべきじゃないよね。

優子「ふん……事情ねえ」

優「……」

木下さんは何故か僕のことをジロジロと見つめていた。
その類は何故か赤く染まっているように見えたけど、多分夕日の

せいなのだろう。

優子「あの……今日は本当にありがとう。このお礼はいずれきつちりとさせてもらうわよ」

優「え？いいよお礼なんて！！僕はただ当然のことをしただけで！」

優子「何を言っているの？不良に絡まれている子を手助けしようとするなんて、相当の勇気が必要なことなのよ？それに助けてもらったのにお礼をしないなんてアタシの気が済まないわ」

優「いや……でも」

優子「あのねえ……人の好意は素直に受け取るべきだと思うわよ？アタシの気が済まないっているのだから、あなたは素直にお礼を受け取る義務があるわ」

どうしよう……。元々は秀吉だと勘違いして助けに行ったのだが、実際に助けたのは秀吉のお姉さんも木下さんの方で、彼女は僕に何かお礼をしたいというが、僕はお礼を貰うために行動したわけじゃない。

けど、ここまで言い切る彼女の行為を受け取らないのは逆に失礼なんじゃないだろうか？

……うん。ここは素直に受け取るべきなのだろう。

優「……分かりました。今日はもう遅いですし、お礼の件はまた今度ということで」

優子「そうね。もう日が落ちる頃だし、そろそろ帰るわ」

優「あの……家まで送って行きますよ？秀吉の家の場所は知ってるし、さつきみたいのがまた現れたら大変だと思うし」

優子「……そうね。よろしくお願いできるかしら？」

優「もちろん。木下さ「優子」……え？」

木下さんに話の途中で阻まれてしまう。

優子って、木下さんの名前だよね？

優子「アタシのことなら優子って呼んで。秀吉と同じ苗字なんだからそう呼ばれるとややこしいのよ。あなただって、妹さんがいるから同じ苗字の方で呼ばれるとややこしいと思うことがあるでしょう？だから、アタシの方も優君と呼ばせてもらうわ。改めてよろしくね、優君」

彼女はそう言って右手を前に差し出し、握手を求めてきた。
僕も右手を前に出して、彼女の右手を握って握手を交わす。

優「こちらこそよろしくお願いします。優子さん」

これが僕と彼女の初めての出会いだった。
このことがきっかけで彼女とFクラスが親密に交わることなんて、
このとき僕はそんなことを思ってもいなかった。

第九・五章：吉井明久と姫路瑞希と変わった不幸の手紙？

特別問題 出題者：水菜優

問 以下の問いに答えてください。

『料理の味付けの基本になる五つの調味料の語呂合わせである「さしすせそ」。これら5つ全て答えてください』

吉井明久の答え

『？砂糖 ？塩 ？酢 ？醤油 ？味噌』

水菜優のコメント

流石だね、明久。稀に「さしすせそ」の「し」の部分で醤油と答える人がいるけど、明久には簡単すぎたね。

坂本雄二の答え

『？砂糖 ？塩 ？酢 ？醤油 ？味噌』……お袋には絶対に料理はやらせねえ……。

水菜優

正解なんだけど……僕としては最後の方に書かれていた内容の方が凄く気になる……。

雄二のお母さんって、料理ができない人？内容からして壊滅的なんだと思うと深く同情するよ……。

水菜唯の答え

『？砂糖　？醤油　？酢　？洗剤　？味噌』

水菜優のコメント

まさかとは思ったけど見事に「し」の部分を間違えてるね……。

「せ」の部分については……そうだね。

この前、お米を洗剤で洗おうとしていたのを止めたけど……この解答を見た限り、まだ勘違いしているみたいだね……。今度一緒に調理実習のお勉強をしようね。

特別ゲストさんの答え

『？明兄への愛　？私の真心　？明兄が私の料理を食べて喜んでくれる姿　？その後、明兄の悶え苦しむ姿　？最後にとっておきの隠し味、私の睡え……秘密です』

水菜優のコメント

なんていうか……名前は伏せてあるけど、内容からもう誰なのか分かるよ……。

「さしすせそ」……関係無いじゃん……。

あと！！？の部分はなに？！なんで君が作った料理を食べた明久が悶え苦しむの！？おかしいよね！？一体なに入れたの？！

？の部分については途中から慌てて書き止めたみたいだけど……分かる人には分かるよね、絶対……。

最後にもう1つ言わせてもらうけど、君の明久に対する愛情という名の料理は酷く歪んでいるから。明久には、君が調理台に立つことや料理をすることもやめさせるように言っておくね。

姫路瑞希の答え

『？酢酸　？硝酸　？水銀　？青酸　？炭素粉末』

水菜優のコメント

もはや調味料ですらないんですけど?! なんで姫路さんの家には、
さも当然のように化学薬品が置いてあるの!? ある意味、特別ゲス
トより酷い解答なんだけど?!
それ以前になんでご両親からお咎めなしなの!? 絶対におかしいよ
ね?! 君の家庭!!

お願いだから調理の勉強を一からやり直して!! このままほっとけ
ば死人が出るから! 洒落にならないから!!

明久「はあ、やれやれ」

あの後、優と別れた僕は嘆息しながら上履きを履き、Fクラスに
向かっていた。

毎日教科書を持ち帰っていたというのに、今日に限ってなんで忘
れてしまうのだろう……?

優には悪いことをしてしまった……。僕のことを気遣って勉強会
をしてくれると言ってくれたのに……。今更後悔しても後の祭りな
んだけど……。

1人、心の中で愚痴っていた僕はようやくFクラスの教室の扉の
前に立ち、勢い良くその扉を開けた。

姫路「え……? よ、吉井君!？」

明久「あれ? 姫路さん?」

誰もいないと思っていた教室には何故か姫路さんがいた。

意外だ。優等生の姫路さんのことだから、すでに家に帰っている
と思っていたけど。

姫路「どどどうしたたんですか？」

何だか相当慌てている様子だけど……僕、知らない間に姫路さん
に何か悪いことをした？

姫路さんが座っている席（？）を見る。卓袱台の上には可愛らし
い便箋と封筒が置いてあった。

僕の視線に先に気づいたのか、姫路さんはさらに慌てた。

姫路「あ、あのっ、これはっ」

何をしているんだろう。あれはまるで誰かに贈るラブレターに使
うような便箋と封筒のようではないか。

明久の中の悪魔『現実を見る。明らかにラブレターだ』

はっ！？貴様は僕の心の中に住まう悪魔なのか？！

くそっ！さては僕を陥れようと出てきたな！！

負けてたまるか！出てくるんだ！僕の心に住まう天使よ！

明久の中の天使『現実を見なさい、吉井明久。あれは紛うこと無き
ラブレターです』

あれ！？僕の天使も悪魔側の味方！？おかしいよね？！それじゃ
あ僕には善の心はないってことになるじゃないか？！

嘘だ！誰でもいいから嘘だと言ってくれ！！

そんな僕の心の中で悪魔と葛藤を繰り広げているのを知ってか知
らずか姫路さんは心配そうな顔を向ける。

姫路「あの、吉井君？」

明久「え？あ、うんうん。分かってる。大丈夫だよ」

姫路「これはですね、その……えっと　ふあっ」

コテン、と卓袱台につまずいて転ける姫路さん。

その拍子に隠そうとしていた手紙が僕の目の前に飛んできて、次の一文が目に入る。

好きです』

《あなたのことが

明久「……………」

明久の中の悪魔『……………これ以上はない物的証拠だと思っが』

明久「……………」

明久の中の天使『お分かりになられたでしょう？これが現実です』

明久「……………」

明久の中の悪魔&天使『さ、諦めて認めようぜ？（さあ、素直に認めなさい）』

飛んできた手紙を綺麗にたたみ、姫路さんに返してあげる。

姫路さんを気遣うように、今僕はこれ以上にならない満面の笑みを浮かべ一言。

明久「変わった不幸の手紙だね」

明久の中の悪魔&天使『コイツ認めない気だ!』

黙れ。僕の中に住まう悪魔と偽天使め!もう僕は騙されないぞ!!

姫路「あ、あのそれはそれで凄く困る勘違いなんですけど……」

明久「そんなことしないで、言ってくれたら僕が直接手を下してあげるのに。安心して。優に頼んで、手裏剣やクナイ、まきびしといった本物の忍者道具一式を借りてくるから」

え?なんで優からそんな物を借りることができたの?

そりゃあ、優と唯が忍者の末裔出身の家に住んでいるからに決まっているじゃないか。

優や唯も普段から防犯用に持ち歩いているんだし。

え?手裏剣やクナイは刃物だから銃刀法違反で逮捕されるんじゃないかって?

大丈夫。あの2人が普段持ち歩いている手裏剣やクナイはアルミ製だし、まきびしだって防犯用に作られた物しか持っていないって。本物の手裏剣やクナイ、まきびしは優と唯の家のインテリアとして飾ってあるから、それを借りれば問題なし!!

姫路「吉井君。そんなことなくても私は大丈夫ですし、それにこれは不幸の手紙じゃないですから」

明久「嘘だ!それは不幸の手紙だ!実際に僕はこんなにも不幸な気

分になっているじゃないか！」

姫路「吉井君」

子供のように手を振り回していると、きゅっと姫路さんに手握られる。

姫路「落ち着いて下さい。そんなに暴れると身体をぶつけて怪我をしますよ？」

まるで、駄々を捏ねている子供をあやすようにそんな言葉を投げ掛けてきた。

僕はようやく落ち着きを取り戻し、素直に現実を認めてしまう。

明久「……仕方ない。現実を認めよう……」

がつくりと膝をつく僕。なんだろうこの敗北感……。それにしても、あのラブレターの宛先は一体……？

そういえば、教室に帰る前に姫路さんが雄二に大事な話をしていたみたいだが、それと関係があるのか？

明久「その手紙、相手はウチのクラスの」

姫路「……はい。クラスメイトです」

顔を真っ赤にしながらも迷うことなく答える姫路さん。

これだけじゃまだ、手紙の宛先が雄二だと断言できない。

もう少し、情報が欲しい。

明久「……そっか。でも、そいつのどこがいいの？そりゃ確かに、

外見はそれなりだとは思うけど」

姫路「あ、いえ。外見じゃなくて、あつ、もちろん外見も好きですけど!」

ダメだ。これだけの情報じゃ、まだ誰なのか分からない。
だが!そんなことよりも!!

明久「憎いつ!!そいつが心底憎い!」

姫路「そう、ですか……?」

明久「うん。外見に自信のない僕には羨ましくて」

姫路「え?どうしてですか!?とっても格好良いですよ!私の友達も結構騒いでいましたし!」

明久「え?本当?」

なんていい友達を持っているんだ、姫路さん!今の言葉で結構自信がついてきた!!

姫路「はい。よく分からないですけど、坂本君か水菜君と2人でいる姿を見ては『たくましい坂本君が可愛い系の水菜君と美少年の吉井君が歩いているのって絵になるよね』ってよく言っていました」

明久「へえ、そうなんだ。いい友達なんだね、その子」

姫路「『やっぱり坂本君だと受けて、水菜君だと攻めなのかな?』

とも」

明久「前言撤回。その友達とは距離をおこう。姫路さんにはまだちよっと早いと思う」

僕が雄二が優と歩いているとそんな目で見られていたとは。今度からその辺は気を付けないと悪い噂が出回るかもしれない。

明久「それにしても。外見もつてことは、中身が良いの？」

姫路「あ、えーっと……はい……」

明久「えーっと、その人の性格のどこがいいの？」

姫路「や、優しいところとか……」

優しい？ウチのクラスの優しい人となると、限られてくるんじゃないか？

やっぱり雄二？それとも優？あるいは秀吉？まさか、男に対する想いを通り越して、唯とか島田さんとか？！

それはそれだとしたらすごく悲しい……。

姫路「優しくて、明るくて、いつも楽しそうで……私の憧れなんです」

その真剣な口調からは、普段の姫路さんとは思えない程の強い想いを感じられた。

これ以上、探るのは野暮な気がしてきた。

明久「その手紙」

姫路「は、はい」

明久「良い返事が貰えるといいね」

そこまで好きになった相手なら、クラスメイトとして応援してあげたいくらいだ。

姫路「はいっ！」

嬉しそうに笑う姫路さんは本当に魅力的で、誰かも分からぬ相手に心の底から羨ましいと思った。

第十章：あれはお弁当ですか？いいえ、お弁当という名の殺戮兵器です

特別問題 出題者：吉井明久

問 以下の名言の（ ）に当てはまる言葉を書き入れよ。

『少年よ（ ）を抱け』

姫路瑞希と水菜優の答え

『『大志』』

吉井明久のコメント

流石、姫路さんと優！見事正解だ！！

木下秀吉の答え

『勇気』

吉井明久のコメント

間違っているけど、僕はこの答えは嫌いじゃないよ。

島田美波の答え

『殺意』

吉井明久のコメント

少年の身に一体何があったんだ。

坂本雄二の答え

『罪』

吉井明久のコメント

本当に少年の身に一体何があったというんだ!?

水菜唯の答え

『大量殺人』

吉井明久のコメント

ドンだけ重い罪を背負っているの?!少年!?

土屋康太の答え

『エロス』

吉井明久のコメント

謝れ。取り敢えず時を遡るか天国に行ってウィリアム・スミス・クラークに土下座してこい。

秀吉「優。本当に昨日姉上と一体何があったのじゃ?」

試召戦争で消費した点数を補給する為に早めに教室に向かい、自分の席に座った僕の目の前に現れた秀吉は突然、そんなことを聞いてきた。

優「何があっただって……昨日話した通りだよ?」

そう。昨日、秀吉の姉である優子さんを家まで送っていったときに家から出迎えた秀吉は僕達が一緒にいることに凄く驚いたのだ。

取り敢えず、どうして優子さんと一緒に帰ってきたのか、その経緯を秀吉に話した後、僕は自分の家に帰ったのだ。ただ、お姫様抱っこをした件に関しては優子さんに事前に口止めされたのだ。実の弟とはいえ、知られるのは恥ずかしいからという理由でだ。

秀吉「いや、しかし……お主が帰った後、ワシは姉上にお主のことに關して小一時間ほど質問攻めを受けたのじゃが」

優「そう言われても……僕はただ不良から優子さんを助けただけで」

秀吉「……む？ゆ、優……！？お主、いつの間に姉上のことを名前で呼ぶほど親しくなったのじゃ？！」

優「え？いや、昨日初めて会ったんだからそんなに親しくわ……。それに優子さんがそう呼ぶように言われたからだけど……。何か問題でも？」

秀吉「い、いや、別に問題は……。しかし……まさかとは思うが……。……しかし、あの姉上が……。？」

優「……？」

秀吉は何か考え込みながら自分の席へと戻っていつてしまった。本当になんだったんだろう？

明久「おはよー」

教室の戸を開ける音が聞こえるのと同時に明久の声が聞こえた。

雄二「おう明久」

唯「おはよう、吉井」

優「おはよう、明久」

早速恒例の挨拶を交わし合う僕達。

やはり、友達との挨拶は大事だと思う。

これをして今日一日が始まった気がしないのだ。

雄二「それで明久。昨日の後始末はどうなったんだ？」

明久「昨日の後始末？」

唯「ああ、船越先生のことね。坂本君が吉井を陥れようとしたことで起きた後始末を……ね（ジャラ）」

雄二「その件については心の底から悪かった！だから何処からともなく拷問器具を取り出さないでくれ！！」

昨日のことを思い出し、手品のように鞭と鎖を取り出す唯。

本当に僕の妹は明久のことになると暴走しがちになる。

それを毎回止めるのは僕と明久の役目なのだが、流石の唯も昨日ことを反省しているのか、雄二の言葉を素直に聞き、拷問器具を鞘の中にしまった。

唯「まあ、いいわ。それで吉井、どうなの？」

明久「とりあえず、近所のお兄さんを紹介するよ。お兄さんの方から了承も得たから、問題ないと思うけど」

優「そのことを船越先生には？」

明久「いや、まだ話してない。今日中に話すつもり」

美波「それなら丁度良かったじゃない」

昨日の船越先生の件で話している最中に島田さんが話題に入ってきた。

島田さんは先程まで教室にはいなかったのはただ単に遅刻ギリギリの到着なのだろう。

それよりも……。

明久「おはよう、島田さん。それより丁度良いって、どういうこと？」

美波「あれ？知らないの？1時間目の数学のテストだけど。監督の先生、船越先生だって」

島田さんの言うとおり、それは確かにいいタイミングだ。

船越先生には明久の呼び出しの件を早めに話しておく必要がある。そうしないと、船越先生の頭の中で明久が大変なことになっているかもしれない。

そんな状態で明久の話を聞いてくれるかどうか1時間目を知らせるチャイムが聞こえるのだった。

明久「助かったよ、優、唯。僕だけだと、船越先生は話を聞いてくれそうにない勢いだったから……」

優「そうだね。あれは凄かったね……」

唯「そうね……。あ、言つとくけど別に吉井のためじゃないんだからね?!」

4教科が終了した後、僕達は1時間目に起きた悲劇を思い出していた。

数学のテストを終えた後、船越先生は明久を引っ捕えて、教室から出て行ってしまう。

慌てて僕と唯は後を追うと廊下で暴走している船越先生と結婚を前提にした交際を求められて慌てていた明久の姿が映ったのだ。

僕達は明久と一緒にどうにか船越先生を落ち着かせた後、昨日の件は近所のお兄さんを紹介するために呼んだということでは何とかその場を収めたのだ。

明久「それにしても……疲れたよ……」

秀吉「うむ。疲れたのう」

優「うわ!秀吉、いつの間に!?!」

康太「……………(コクコク)」

唯「む、ムツツリー二君まで」

いつの間にか近くいた秀吉と康太が答える。

秀吉は髪をポニーテールにしている。

康太の方は相変わらず無口だが、頭を縦に頷くことで同意している。

雄二「よし、昼飯食いに行くぞ！今日はラーメンとカツ丼と炒飯とカレーにすっかな」

まるで疲れを感じていない雄二はそう言いながら勢い良く立ち上がった。

それにしても相変わらず凄い胃袋だ。

メニューからして今日は学食にするつもりなんだけど、いくらなんでも食べ過ぎだろと思う。

僕も結構大食いな方でいつも重箱を持参しているが、流石に雄二ほどではない。

それはさておき、僕と唯もお弁当を用意して雄二達と一緒に食事をしようと立ち上がる。

僕達はいつもお弁当を持参しているが、雄二達と一緒に食べていることが当たり前になっているのだ。それと今日も明久はお弁当を持参していないそうだ。

僕達と一緒に食堂に行くことを気づいたのか島田さんが話しかけてきた。

美波「ん？吉井達は食堂に行くの？だったら一緒にいい？」

雄二「ああ、島田か。別に構わないぞ」

美波「それじゃ、混ぜてもらっね」

康太「……………（コクコク）」

姫路「あ、あの。皆さん……………」

学食に行こうとする僕達は姫路さんに呼び止められた。

唯「なに？姫路さん？姫路さんも一緒に学食に行きたいのかしら？」

姫路「あ、いえ。え、えっと……………、お、お昼なんですけど、その、昨日の約束の……………」

姫路さんは恥ずかしそうにもじもじしながら僕達を見ている。
昨日の約束ということは…手作り弁当を作ってきてくれたのかも
しれない。

秀吉「おお、もしか弁当かの？」

姫路「は、はいっ。迷惑じゃなかったらどうぞっ」

そう言っただけ姫路さんは後ろに隠していたバックを出してくる。
その言葉に明久の目は輝いていた。

明久「迷惑なんてとんでもない！ぜひにお願いしたい！」

雄二「ああ、そうだな。ありがたい」

姫路「そうですか？良かったあゝ」

ほにやっとなで嬉しそうに笑う姫路さん。

大抵の男なら思わず見とれてしまう笑顔ではないだろうか？

やはり姫路さんは優しいっというイメージの強い人だ。

美波「むー……。っ。瑞希って、意外と積極的なのね……」

唯「ううゝ……。油断したわ」

一方の島田さんは姫路さんの認識を改め始め、唯はその場で落ち込んでしまう。

秀吉「それでは、せっかくのご馳走じゃし、昨日と同じ屋上でも行くかのう」

明久「そうだね」

折角の女の子の手料理なんだ。

カビ臭い教室で食うのはどうかと思うので、秀吉の言うとおり屋上でみんなと一緒に食事することにした。

雄二「そうか。それならお前らは先に行っててくれ」

優「え？雄二はどこか行くの？」

雄二「飲み物でも買ってくる。昨日頑張ってくれた礼も兼ねてな」

美波「あ、それならウチも行く！1人じゃ持ち切れないでしょ？」

雄二のことを気遣ってくれる島田さん。

流石に雄二1人では、この人数分の飲み物を1度に持ち運ぶのは結構大変だろう。

雄二「悪いな。それじゃ頼む」

美波「おっけー」

雄二「お前ら。きちんと俺達の分をとっておけよ」

明久「了解。その点は任された！」

優「でも、あまり遅くなると確保できなくなるよ？」

雄二「そう遅くはないはずだ。じゃ、行ってくる」

雄二と島田さんはそれぞれのお財布を持って教室を出ていった。
おそらく、1階の売店で飲み物を購入するのだろう。

明久「僕等も行こうか」

姫路「そうですね」

明久は姫路さんが抱えていたバックを受け取ったあと、僕達は屋上へと向かうために教室を出て行く。

人数分を作ってきてくれていると考えると結構重いかもしれない。

優子「あら？おはよう。秀吉、優君」

秀吉「え？あ、姉上？！どうしてこんな所におるのじゃ！？」

屋上に向かう途中、意外な人物と出くわしたのだ。

昨日会ったばかりで、秀吉の双子のお姉さんである優子さんと。
その右手にはお弁当をぶら下げていた。

明久「え……？ひ、秀吉のお姉さん？確かに双子とは聞いてたけど……」

康太「……………瓜2つ」

改めて見ると本当に秀吉と優子さんはそっくりだ。

優子さんが男子生徒服を着るか、秀吉が女子生徒の服を着てしまえば見分けがつかないほどだ。

唯「ちょ、ちょっと待って！今、優兄のことを名前で呼んだよね？優兄って、Aクラスの木下さんと知り合いだったの！？」

優「う、うん。昨日、帰り道で不良に囲まれていた優子さんを助けたんだ」

明久「え！？大丈夫だったの？！」

優「大丈夫だよ、明久。優子さんも僕も怪我はしていないよ。それよりも、さつき秀吉も言ってたけど、優子さんはどうしてここに？この先はEクラスかFクラス、後は文化部ぐらいのはずだけど？」

優子「あ、アタシ？アタシは、その／＼／＼……そう！貴方にお礼は何がいいか聞きに来たのよー！」

お礼って、昨日の？

確かにお礼を聞くために僕に尋ねるならFクラスに直接向かうしかない。

でも、なんだろう？優子さんのこの慌てよう？

それにそれを聞くためならお弁当を持ってくる必要はないのでは？

唯「ふうん？でしたら、その話を踏まえ、木下さんもお昼一緒に
どうです？まあ、そのつもりで優兄を誘いに来たんじゃないですか
？」

優子「え？！い、いや……その？！って貴方は？」

唯「初めまして、優兄の妹の水菜唯です。唯って呼んでください。
それでこちらはアタシの友達の」

明久「あ、初めまして、木下さん。吉井明久です」

康太「……………土屋康太」

姫路「あ、あのっ、姫路瑞希です。よろしくお願いします」

優子「あ、こちらこそよろしくって、姫路瑞希！？どうして貴方が
Fクラスに？！」

あ！しまった……。姫路さんの存在はAクラスには秘密にしてお
く筈だったのに。

いや、でもあのAクラスならバレるのは時間の問題なんだから、
今バレても差ほど問題はないはず……だよね？

今更隠すことは無理みたいだし、どうしよう？

そんなことを考えながら秀吉の方を見るとなんか信じがたいモノ
を目にしたような顔付きをしていた。

秀吉「あ、あの、あの姉上がわざわざ他のクラスの者をお昼に誘う
じゃと……？や、やはり姉上は優に一目b「秀吉……？」ひいひい
？！あ、姉上！？」

優子「それ以上言つと……分かるよね？」

優子さんは両手をボキボキと鳴らすとその腕で何かを捻るような仕草を見せる。

あれって、まさか昨日僕に喰らわせた関節技？

それ以上喋れば関節技をきめるという合図なのだろう。

なにを黙るのは分からないが、その笑顔はそれ以上喋ればと問答無用でへし折るつという気迫があった。

そういえば、昨日は秀吉と間違えたことで関節技を喰らったが、どうして優子さん関節技が得意なんだろう？

秀吉「わ、分かったのじゃ！黙っておるから関節技だけは勘弁なのじゃ！」

まさかと思うが、秀吉は日常的に優子さんの関節技の餌食になっているのだろうか？

あれを実際に喰らった僕もその痛さは実感している。

今後、優子さんを怒らせるようなことはしないと心の中で密かに誓うのだった。

優子「うーん……そうね。姫路さんや優君と唯さんがどうしてFクラスにいるかも聞きたいし……ご一緒させてもらえるかしら？」

唯「決まりね。皆もそれで良いかしら？」

明久「もちろん。秀吉のお姉さんなら大歓迎だよ」

康太「……………俺も大歓迎」

姫路「あつ、あの、私も賛成です」

優「異論なんてあるはずないよ。僕も優子さんとなら歓迎するよ」

秀吉「ワシも異論はないが、まさか姉上とFクラスの者が一緒に食事できる日が来るとうのはのう」

そうだよね……。普通に考えれば、Aクラスの生徒がFクラスの生徒と一緒に食事なんてありえない出来事だからね。

優「それじゃ、時間も惜しいことだし、そろそろ屋上に向かおう」

こうして、優子さんも交えてお昼を頂くことにした僕は屋上まで歩いて行く。

屋上までに到着する間まで、僕は優子さんに姫路さんと僕達がFクラスに行くことになった事情を説明した。

僕達の事情には心底驚いたが、事情を話すごとに納得してくれた。納得した後に、「アタシには到底できないことだわ。貴方達、凄く友達思いなのね」っと、苦笑したのだ。

その後は、他愛もない談笑を続けてながら屋上の扉を開いた。

秀吉「天気良くてなによりじゃ」

姫路「そうですねー」

昨日と同じで雲が1つも無い青空の下は、絶好のお弁当日和だ。

姫路「あ、シートもあるんですよ」

優子「用意周到なのね。アタシも手伝うわ」

姫路さんがバックから取り出したビニールシートを屋上のコンクリートに敷くのを優子さんが手伝ってくれる。

屋上には僕達以外は誰もいない。完全に貸切り状態だ。

唯「風が気持ちいいわね」

康太「……………（コクリ）」

屋上から吹く風と日差しは妙に心地いい気持ちになれる。

姫路「あの、あんまり自信はないんですけど……………」

優&唯&明久&康太&秀吉&優子「『『『『『『『『『『』』』』』』』』』』』』」

姫路さんが重箱の蓋を取ると、僕達は一斉に歓声をあげた。

とても美味しそうなお弁当だ。から揚げやエビフライにおにぎりやアスパラ巻きなど、お弁当の定番メニューが重箱の中に詰まっている。

僕と唯と秀吉と優子さんはお弁当を持ってきているが、少し分けもらうことにした。

主に食べるのは明久と雄二と康太だ。

明久「雄二と島田さんには悪いけど、先に」

康太「……………（ヒョイ）」

唯「あ！抜け駆けよ！ムツツリー二君！」

動きの素早い康太がエビフライを掴み取る。

そして、流れるように口に運び、食べた

康太「……………（パク）」

バタン

ガタガタガタ

瞬間、豪快に顔から倒れ、小刻みに震え出した。

優&唯&明久&秀吉&優子「……………」

僕達はその光景に啞然しながら互いに顔を見合わせえる。

姫路「わわっ、土屋君!？」

姫路さんが慌てて、僕達に配ろうとしていた割り箸を取り落としてしまう。

が、今は康太の方が心配だ。一体どうしたというんだ?!

康太「……………（ムクリ）」

心配をしていると康太が起き上がった。

康太「……………（グッ）」

そして、姫路さんに向けて親指を立てる。

おそらく、『凄く美味しい』と伝えたいのだろう。

だが、康太。それなら何故、君の足はK O寸前のボクサーのようにガクガクと震えているの?

何故、君の目は虚ろになっているの？

姫路「あ、お口に合いましたか？良かったですっ」

康太の言いたいことが伝わったのか、姫路さんが喜ぶ。
しかし、康太は今だ足を震わし、目は虚ろになっている。

姫路「良かったらどんどん食べてくださいね」

姫路さんが笑顔でお弁当を勧めてくる。

そんな笑顔だと大抵の男なら断りきれないだろう。
だが、現状が現状だ。あれは不味いとかそういうレベルではない。

明久（ねえ、皆。あれ、どう思う？）

明久が姫路さんには聞こえないように小さな声で姫路さんと康太
以外に話しかけてきた。

優（どう思っつて……。あれはヤバイと思う）

唯（でも、あれはムツツリー二君の演技ってことも……）

秀吉（いや、ワシから見てもあれは演技には見えん）

優子（え？なに？姫路さんて、実は料理ができない子なの？）

優（いや……昨日のお昼、姫路さんは平然と自分のお弁当を口に
していたから、料理が下手な子とは思わなかったけど……）

唯（でも、あれはどう見てもヤバイよね？）

僕達は姫路さんに表情を悟らぬよう笑顔の会話を進める。

秀吉（お主等、身体は頑丈か？）

優（僕は結構頑丈だと思う。この場にいる皆は人並程度ならあると思うけど。……え？まさか食べる気！？）

秀吉（そつじゃ。ここはワシに任せてもらおう）

優子（無茶よ、秀吉！いくら『鉄の胃袋』のアンタでも！！）

明久（そつだよ、秀吉！危ないよ！）

唯（考え直さないさい！今ならまだ後戻りできるわ！！）

勇氣ある秀吉の台詞を聞いた僕達は秀吉を静止させようと説得する。

秀吉（大丈夫じゃ。姉上も知つてのとおり、ワシは存外頑丈な胃袋をしていてな。ジャガイモの芽程度なら食ってもびくともせんのだや）

見かけによらずタフな内蔵をしているようだ。ジャガイモの芽は毒だから、それを食べて平気なら大丈夫かもしれない。

しかし、康太はエビフライを食べただけで撃沈したのだ。そんな料理を1人であの量を食べきるなんて無茶だ。

明久（でも、いくらなんでもあの量を食べきるなんて……）

秀吉（安心せい。ワシの『鉄の胃袋』を信じて　　）

雄二「おう、待たせたな！って秀吉が2人に分裂しているだど！？」

優子「なんでそうなるの！？分裂もしていないし、秀吉でもない！アタシは優子よー！」

雄二「な、なんだ。秀吉の姉の方か……。そいつは悪かったってどうしてAクラスであるはずの秀吉の姉がここにいる！？」

遅れて来た雄二が予想外の人物である優子さんがいることに驚く。
雄二と島田さんには優子さんが一緒に食事をすることを知らなかったから、驚いて当然の反応だ。

優子「アタシがここにいるのは、優君の妹さんである唯さんに誘われたからよ。別におかしくないでしょ？それより貴方は？」

雄二「あ、ああ、すまん。俺はFクラス代表の坂本雄二だ。さつきは失礼した。まさかAクラスの奴がFクラスの連中とお昼を一緒にしているなんて、有り得ねえ光景だったからな」

優子「気にしてないわ。それが普通の反応だとアタシも思うし。アタシは木下優子。よろしくね、坂本君」

雄二「ああ、こちらこそよろしく」

姫路「あ、坂本君。よろしかったら、どうぞ」

優子さんのやり取りで雄二の存在に気づいた姫路さんは雄二に料理を勧めてきたって、マズイ！！

雄二「へー、こりゃ旨そうじゃないか。どれどれ？」

明久&優「雄二！待った！！」

明久もそのことに気づき、一緒に雄二を静止させようとするが、既に遅かった。

雄二は素手で卵焼きを口に放り込んでいたあとだった。

いや、もしかしたら……雄二なら姫路さんの料理でも卵焼き程度なら平気なのでは？

今日の学食でラーメンとカツ丼と炒飯とカレーを食べようとした彼の驚異的な胃袋なら！

パク

バタン

ガシャガシャン、ガタ

ガタガタガタ

残念ながら、驚異的な胃袋を持つ彼であつても姫路さんの料理の前では手も足も出ないみたいだ。

雄二はジュースの缶をぶちまけながら倒れてしまう。

美波「さ、坂本！？ちよつと、どうしたの！？」

遅れてやってきた島田さんが駆け寄った。

そんな光景を目の当たりにした僕達は再び顔を見合わせ同時に思つたはずだ。

優&唯&明久&秀吉&優子「……………間違いない。コイツは、本物だ（本物ね）……………」

この場にいる皆がそう思ったに違いない。康太と同様に激しく震える雄二を一齐に見る。

すると、雄二は倒れたまま僕と明久を見つめ、目でこつ訴えていた。

『毒を盛ったな』と。

明久『毒じゃないよ、姫路さんの実力だよ』

優『悪い意味で……ね』

僕達も目で返事をする。いつも一緒に行動してきた僕達だからこそなせる技。

唯と秀吉と康太もできるので内緒の話をする場合、こつというのは凄く便利だ。

雄二「あ、足が……攣ってな……」

姫路さんを傷つけないために嘘をつく雄二。

彼はこういう時は紳士的なのだ。

優子「いや、坂本君。どうしてうs（バツ！）むぐう？！」

慌てて嘘をばらそうとする優子さんの口を塞ぐ。

折角の雄二の気遣いを無駄にする訳にいかない！！

優（優子さん！雄二は姫路さんを傷つけないために嘘を言ったんだ。ここは話を合わせて！）

優子「む、むっぐぐ／＼／＼（わ、分かったわ／＼／＼）

美波「って、あれ！？木下、アンタいつの間に分身の術を？！」

優子「ぷはあ！ってどうして貴方も坂本君とほぼ同じ反応なの？！アタシは秀吉の姉の木下優子よ！」

美波「え？木下のお姉さん？！木下のお姉さんはAクラスの筈でしょ？どうして一緒にいるの？」

唯「実は木下さんは優兄の知り合いなの。偶然にも屋上に行く途中で会ったから、食事に誘ったのよ」

美波「へえ、水菜とは知り合いだったんだ。ウチは島田美波っていうの。よろしくね」

優子「こちらこそよろしくね」

唯のフォローで何とか優子さんと島田さんの紹介は手短に終わった。

こちらの方は大丈夫そうなので、雄二のフォローにまわる。

優「雄二、ダッシュで階段の昇り降りしたからそうなったんじゃないかな」

明久「そうだね。雄二も急ぐ気持ちも分かるけど無茶しないでよ」

秀吉「うむ、そうじゃな」

美波「え？そうなの？坂本ってこれ以上ないくらい鍛えられている

と思うけど」

事情の知らない島田さんが不思議そうな顔をする。

彼女が姫路さんの料理を食べてしまったら余計なことを言っ
てしまつかもしれない。

そうなる前にどうやって退場させるべきだろう？

明久「ところで島田さん。その手についているあたりにさ」

美波「ん？なに？」

明久「さっきまで虫の死骸があつたよ」

美波「ええっ！？早くいつてよ！」

明久の嘘に島田さんが慌てて手をよける。

明久「ごめんごめん。とにかく手を洗ってきた方がよいよ」

美波「そうね。ちょっと行ってくる」

そういつて島田さんは席を外したのだ。ナイスフォローだよ明久！
これで島田さんの身の安全は確保されたのだ。

秀吉「島田はなかなか食事にありつけずにおるのう」

明久「全くだね」

はっはっは、笑い合う僕等。

これで残すことは……姫路さんのお弁当（兵器）をどうにかする

だけなのだが……。

雄二（明久、どうすんだ！？俺はもう食べたくないぞー！）

明久（それは僕だって同じだけど、このままだと姫路さんを悲しませちゃうし……）

秀吉（流石にワシもさっきの姿を見ては決意が鈍る……）

優（……僕に任せて）

唯&優子（優兄！？（優君！？））

秀吉（無茶じゃ！雄二も撃沈したあれを食べるなど！）

優（誰も食べるとは言っていないよ）

明久（え？どういうこと？）

優（説明はあとだよ！どうかして姫路さんの意識を逸らして！）

明久（わ、分かった！）

明久「あっ！姫路さん、アレはなんだ！？」

姫路「えっ？なんですか？」

明久が姫路さんに古典的な罽を仕掛ける。

純粋な彼女は見事に引っ掛かってくれたのだ。

その隙に僕は自分のお弁当を雄二に口の中に一杯に押し込み、重

箱の中身を空にしようとする。

さよなら、僕のお昼ご飯……。

雄二（もごああっ！？）

突然のことで雄二は苦しそうにするが、この中でお弁当の一気に食いをできるのは雄二しかない。

優（ゴメン、雄二！ちょっと苦しいかもしれないけど、頑張って食べきるんだ！）

雄二のお陰でお弁当箱は空になり、その重箱に姫路さんのお弁当の中身を移し始めた。

僕の意図に気づいた秀吉と唯と優子さんが率先して手伝ってくれたおかげで、全てのの中身を移し終わることができ、蓋をして後ろに隠す。

明久に作戦終了したことを伝える。

明久「ごめん、見間違いだったよ」

姫路「あ、そうだったんですか」

明久「お弁当美味しかったよ。ご馳走様」

秀吉「うむ、大変良い腕じゃ」

優「ご馳走様。姫路さん」

唯「結構美味しかったわ」

優子「姫路さん、ご馳走様」

皆揃って姫路さんにお礼を言う。

雄二はまだ苦しそうにしているため返答ができないでいた。

姫路「あ、早いですね。もう食べちゃったんですか？」

明久「うん。特に雄二が『美味しい美味しい』って凄い勢いで。ほら？」

雄二の方を見ると、完全には食べきれていないので何とか食べきろうと口を動かそうとする。

知らない者が見れば頬張るほど美味しそうに食べてるという風に見えるだろう。

姫路「そうですかー。嬉しいですっ」

明久「いやいや、こちらこそありがとう。ね、雄二」

雄二「（ゴックン）あ、ああ。ありがとうな、姫路」

優「そういえば、美味しいと言えば駅前に新しい喫茶店が」

「ここで話題を逸らしにかかる僕。これ以上下手なことを言ってしまったら『それじゃ、また作ってきますね』という危険を回避するためだ。」

秀吉「ああ、あの店じゃな。確かに評判が良いな」

唯「そうなのよ。アタシ、1度行ってみたいと思ってたところなの

よね」

姫路「え？そんなお店があるんですか？」

優子「アタシも初耳だわ」

優「それじゃあ、今度今日のお礼ということで一緒に行こう」

優子「アタシもご一緒してもいいかしら？」

優「もちろんだよ！優子さんも是非一緒行こう！」

優子「そ、そうね……その時はご一緒させてもらっわね」

作戦は成功したようだ。恐れていた危機は回避され、取りとめのない会話が続いた。

姫路「あ、そうでした」

姫路さんが何か思い出したようにポン、と手を打った。

明久「ん？どうしたの？」

姫路「実はですね」

「ごそごそ、と鞆を探り始め。

姫路「デザートもあるんです」

とんでもない爆弾^{デザート}を取り出したのだ。

明久「ああっ！姫路さんアレはなんだ！？」

素早く明久が姫路さんの意識を逸らし、その間に作戦会議を始める。

明久（ど、どうする雄二？！デザートじゃ、さっきみたいにお弁当箱に入れようがない！！）

雄二（仕方ない！誰かが犠牲になって食べるしかないだろ！）

優（だったら、ここは僕が！！）

唯（ちよつと待って！優兄が食べるって言うならアタシも！！）

優子（アタシも協力する！）

優（え……2人共なに言ってるの！？あれは女の子の胃で耐えられるはずがない！！僕が犠牲になればそれで済む！）

優子（なに言ってるの？！貴方だけ犠牲にするなんてできるはずないでしょ！！）

唯（優兄の負担はアタシも背負う義務がある！木下さんと3人で分け合えば負担が軽くなるはずよ！）

優（いや、でも！？）

唯と優子さんの2人と言い争っていると、秀吉がすつと立ち上がった。

……ワシがいこう
秀吉

優子（え？秀吉！？）

明久（無茶だよ、死んじゃうよ！）

秀吉（大丈夫じゃ。ワシの胃袋はかなりの強度を誇る。せいぜい消化不良程度じゃろう）

確かにジャガイモの芽の毒を無力化する秀吉の胃なら大丈夫かもしれないが……。

姫路「どうかしましたか？」

明久「あ、いや！なんでもない！」

姫路「あ、もしかして……」

姫路さんが顔を曇らせてしまう。
もしかして、嫌がっているのがバレた！？

姫路「ごめんなさいっ。スプーンを教室に忘れちゃいましたっ」

そう言って姫路さんは僕達に謝ってきた。

そういえば、容器に入っているデザートはヨーグルトと果物のミックス（のように見える）だ。

お箸で食べるというのは難しいはずだ。

姫路「取ってきますね」

スカートを翻し、階下へと消えていく姫路さん。
これは、チャンスなのかもしれない。

秀吉「では、この間に頂いておくかのう」

秀吉は爆弾^{デザート}の容器を手取る。

雄二「……すまん。恩に着る」

明久「ごめん。ありがとう」

優「本当にごめん。秀吉」

唯「木下君？ほ、本当に大丈夫なの？」

優子「秀吉……」

申し訳なさど心配している僕達にフツと軽く笑いかけ、秀吉は言
った。

秀吉「別に死ぬわけではあるまい。そう気のするでない」

唯「そ、そうよ！いくらなんでもねえ？」

優子「よく考えたら、ヨーグルトに果物をトッピングしただけのデ
ザートが不味いはずないわ！」

優「た、確かに、流石の姫路さんでもそれだけの単純作業のデザー
トを不味くできるはずないよね！」

明久「そ、それもそうだね！」

雄二「ああ！秀吉、頼んだぞ！」

秀吉「うむ。任せておけ。頂きます」

容器を傾け、一気にかきこむ。

秀吉「むぐむぐ。なんじゃ、意外と普通じゃとゴばあっ！」

優&唯&明久&雄二&優子「『『『『ひ、秀吉（木下君）！！！！！！』』』』」

また一輪、花が散ってしまった。命という儚い花が。

自称『鉄の胃袋』は姫路さんお手製の爆弾デザートに撃沈し、白目で泡を吹いたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9342n/>

バカとテストと召喚獣.I F ~ 吉井明久の幼馴染と親友と実妹 ~

2011年10月7日17時47分発行